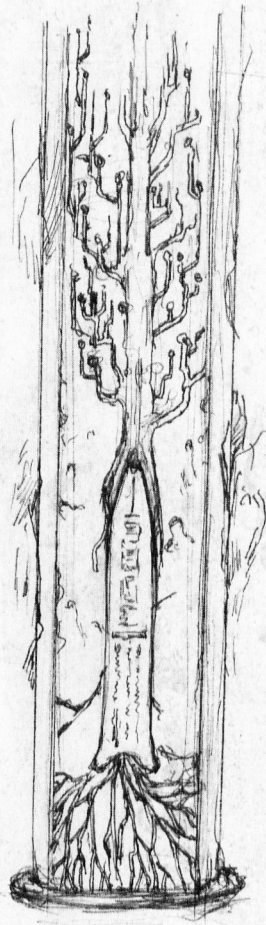


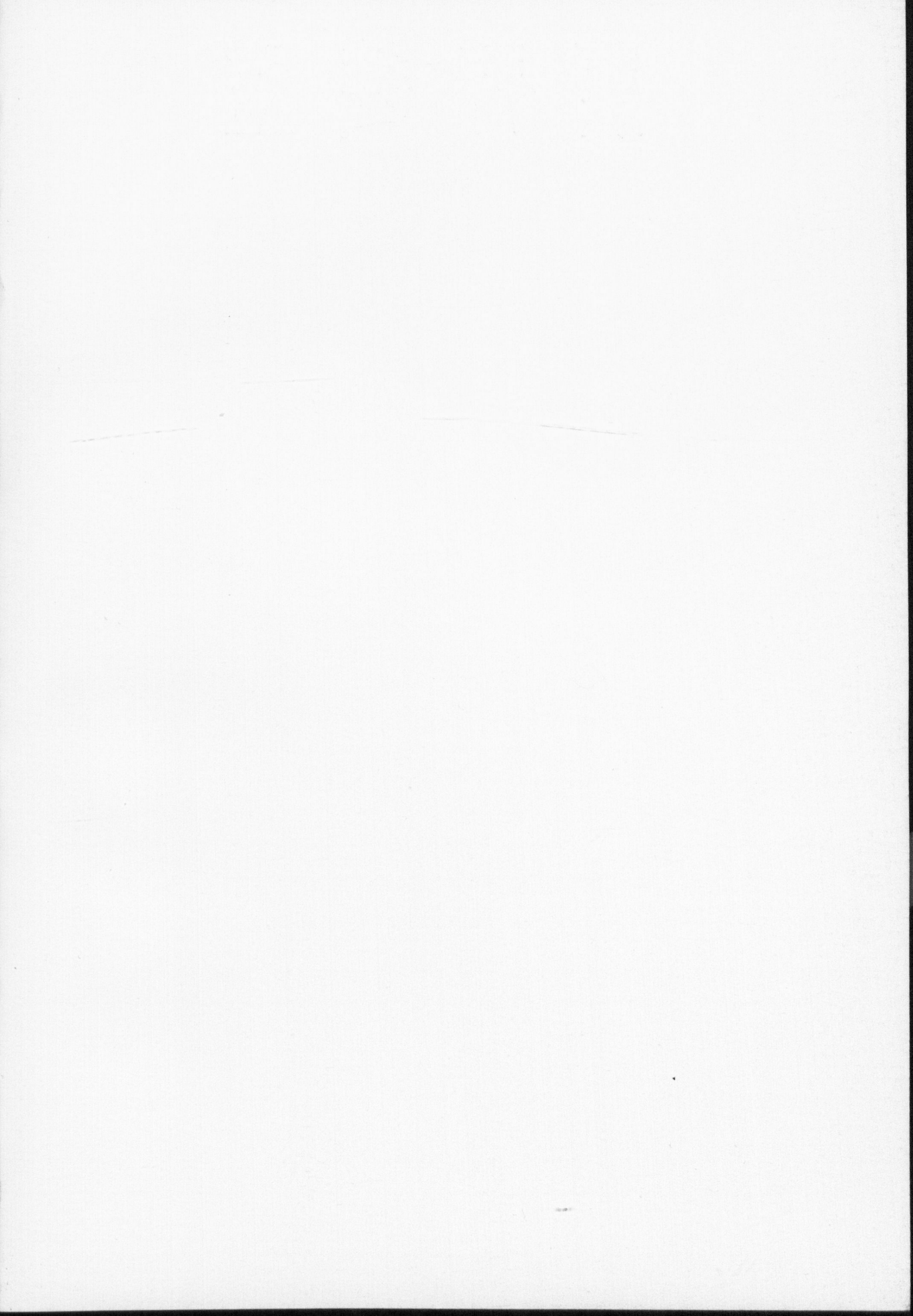
# 盟連羽灰

脚本集 第七卷

第十話、第十一話収録



安倍吉俊



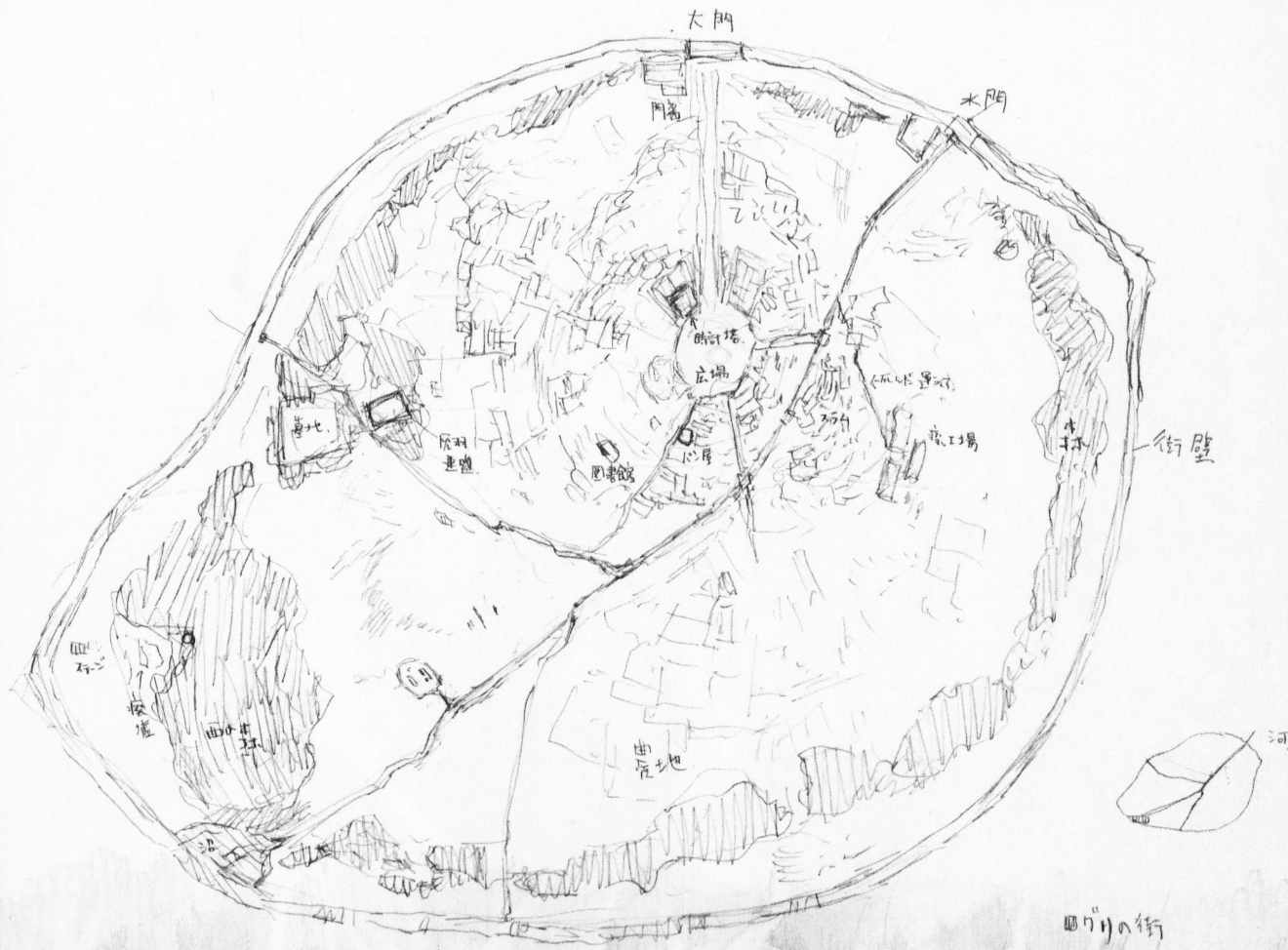




# 灰羽連盟脚本集

## 第七卷





灰羽連盟

LA FILLE QUI  
A DES AILES GRISSES

HAIBANE - RENMEI

# 灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第10話 クラモリ・廃工場の灰羽達・ラッカの仕  
事

第2稿 (2002.08.31)

▲ちょっと長いタイトルだったかもしれない。

▲冒頭のカラーイラストに関して。ラッカの絵は、廉価版のコミックスのパッケージイラストの別案のラフに加筆して着彩した物、レキの絵は描きおろしです。そんなわけで、収録している脚本では既に冬に入っているのにラッカの服が夏服ですみません。

○登場人物

- ラツカ
- ネム
- レキ
- ヒカリ
- カナ
- 連盟員（セリフなし）
- 話師
- オールドホームの灰羽の子供達
- ダイ
- シヨータ
- ハナ
- 寮母
- ヒヨコ
- ミドリ
- クラモリ（声か字幕か未定）



■物置き。オールドホーム全体の設定をしていた時に、何となく『まあ、物置きくらいあるだろう』と、軽い気持ちで設定しておいた物だったが、役に立って良かった。相変わらず対比用の人物が微妙に大きいかなあ。これは癖ですね。直さないで。



● サブタイトル

● 物置き（何か過去の出来事である事を示す処理。声がなく、セリフは字幕とか）

荷物の詰まった物置き。蜘蛛の巣が張り、汚れている。壁には木箱が積み上がり、窓を半ば覆ってしまっている。その窓も、木の板が打ち付けられていて、うっすらと光が洩れているものの、室内は暗い。外は吹雪いているらしく、窓の隙間から、湿った風の音に混じって、かすかに雪が吹き込んでくる。部屋の隅にラツカの時の半分程の大きさの繭がある。荷物に押され、いびつになっている。繭の下部が割れていて、ひとりの少女（レキ）がうつ伏せに倒れている。ラツカの時と同じロープのような白い服を着ているが、ラツカより幼い。10歳前後。長い黒髪が濡れて額に張り付いている。力なく投げ出された細い腕。その指先が痙攣するように震える。

● オールドホーム、中庭

早朝。中庭の北の隅にある物置。深く雪が積もっている。西棟から、12歳のネムが、クラモリの手を引いて駆けってくる。必死の表情で物置を指さすネム。クラモリ、重い鉄のバールを引き摺るようにして、息を切らせながら走る。

● 物置

バールで木の板を壁から剥がそうとするクラモリとネム。バキツと音を立てて、一枚の板が剥がれる。背伸びして中を覗くネム。その途端、短い悲鳴を上げて、クラモリにしがみつく。荒い息をしているクラモリ。物置の中を覗き込む。朝日に浮かび上がった部屋の惨状に息を呑む。

▲ これを書いた当時は、このシーン自体がはっきりと頭に浮かんでいて、それを描写している感じだった。今読み直してもその時の映像は思い出せるのだが、文章的には少し説明が足りない。ネムがクラモリの手を引いて駆けてくる、とあるが、物置さを指さしているネムは、一度クラモリの手を放し、重いバールを持っているクラモリをおいて先に物置きの前まで走っています。

まあ、それは読んで補充できると思うのですが、書いた当時、自分の読解に対してもっともしくりくる書き方をした文章が、4年経って読み返した時に、すんなり読めない事にちょっと驚きました。まあ、絵でも4年前の絵はちょっと見るのがつらいものもあるので、当たり前の事かもしれませんが。

そのせいというわけではないですが、本編では全体的にもう少し流れが整頓されています。

●ゲストルーム

室内。部屋の片隅の繭は、灰のように崩れ掛かっている。その手前の床には血溜まりができ、少女がうつ伏せに倒れている。血に染まった服を裂くように、背中には灰羽の証である羽が生えている。羽は血にまみれているが、その血の上からでもはつきりと分かるほど、黒い斑紋が羽一面をまだらに染めている。

窓を越え、血だらけの少女に駆け寄るクラモリ。服が血で汚れるのも構わず、少女を抱き上げる。うつすらと目を開ける少女。闇に閉ざされていた少女の視界がゆつくりと開ける。少女の目に最初に映ったのは、両の瞳に涙を溜めて、心配げに自分を見下ろすクラモリの姿。クラモリ、少女が目を開けたのを見て安堵の色を浮かべる。少女を抱きしめるクラモリ。

まだ汚れていて廃屋のようなゲストルーム。佇む少女の頭上に光輪を載せるクラモリ。ネムはクラモリの背後に隠れるように立ち、怯えた目で少女を見ている。少女の羽は黒い斑紋に覆われている。光輪は、少しふらふらしていたが少女の頭上で安定する。微笑むクラモリ。

クラモリ「元気になって良かった。私はクラモリ。……ほら、ネム、挨拶は？」

クラモリ、背後のネムを少女の前に促す。ネム、クラモリの影から出ようとしめない。少女、ネムの視線が自分の黒い羽に注がれているのに気付く、無意識に羽を背後に隠そうとする。ネム、ぱつとクラモリから身を離し、走って部屋から出ていってしまう。傷つく少女。半泣きになる。表情を曇らせるクラモリ。

●中庭

数ヶ月経過。雪は溶け、季節はすっかり春。5人程の灰羽の子供達を世話するクラモリと、子供達の中で一番年

▲このあたりも、ものすごく克明にシーンが浮かんでいて、文章を考えるとより、頭に浮かんだ情景をそのまま書いているようで、すらすらと書けていました。

▲文章を書いていた時は意図していなかったけど、絵になってみたら、ひよこが最初に見たものを親鳥だと思う、インプリーティングを連想してしまった。僕だけだろうか？

羽 衾 14才





■レキ、ネム、子供時代。一発でイメージに近い物が描けたので、ラフとかもなく、描いたのはこれだけ。いつもこのくらいすっと決まってくるといいのだけど。

●街

上なので、クラモリの手伝いをするネム。物陰からそれを見ている少女。自分の背中の羽に触れ、泣きそうな顔になる。

数ヶ月経過。クラモリに連れられて街を歩く少女。髪を三つ編みにしている。街の人達の、悪意は無いのだが奇異なものを見る目に怯える少女。クラモリ、自分のケープを外して、羽が隠れるように少女の肩にかけてやる。

●寺院、中庭

数ヶ月経過。寺院中庭の四阿（あずまや）の前。話師と対峙するクラモリと少女。クラモリは鳴子をつけている。レキ、灰羽手帳を手にして話師とクラモリを交互に見上げている。

話師「繭の夢を憶えていない？」

クラモリ、鳴子で肯定を示す。話師、少女に向き直り、頭に手を置く。少女、一瞬怯えるが、害意の無い事を悟り、こらえる。

話師「お前に言葉を発する事を許す。話しなさい。繭の中で何を見た？」

少女「（つつかえながら）私は……気付いたら、石ころだらけの道にいて……真っ暗で……」

話師「それだけか？」

少女、こくと頷く。話師、じつと少女を見る。仮面で表情は読めないが、厳しい視線を感じる。少女を庇うようにクラモリが割って入る。

クラモリ「治りますか？」

言ってしまうから慌てて口をつくむクラモリ。話師、答えるでも答めるでもなく

話師「葉の処方を教えよう。（少女に向かつて）これからはレキと名乗りなさい。小石という意味だ」

▲この前後、傷つく、とか泣きそうな、とか、微妙な感情を表情だけで表さなければならぬシーンがけっこう多かったけど、わりとうまくいっていたように思う。でも、今読み返すと、表情だけでなく何か伝えやすい小道具とかちよっとした仕草とか、もう少し書けたかなとも思う。

レキ「れき……………」

●ゲストルーム

数ヶ月経過。ばん、と、頬を張る音。ごとん、と鉄が床に落ちる。床には黒い羽が散っている。呆然としたレキの顔。キツチン脇の姿見の前。少し成長しているレキ。背中の羽はぼろぼろに切られている。頬を押さえて立ち尽くすレキと、レキの頬を打った姿勢のまま、怒ったような悲しんでいるような表情のクラモリ。クラモリ、レキを強く抱きしめる。なすがままのレキ。自分の行為が自分以上にクラモリを傷つけた事がうまく理解できない。クラモリの肩が小さく震えている。

クラモリ「傍（そば）にいるから。私が傍にいるから……………」

●オールドホーム、正門アーチ

夕暮れ。正門前の橋の袂（たもと）で倒れているクラモリ。泥だらけの服。鞆を持っている。正門アーチを抜けて歩いてきたネム。その後ろ、アーチの影で萎縮しているレキ。クラモリに気付き、驚いて走り出すネム。慌てて後を追うレキ。

●ゲストルーム

ベッドで昏々と眠り続けるクラモリ。頬が泥で汚れている。ベッドの傍に立ってレキを睨むネムと、近寄る事も立ち去る事も出来ず立ち尽くすレキ。

レキ「私の羽の、薬を採りに行くって……………」

ネム「クラモリは体が弱い。一人で森に行くなんて無理なのよ」

ネム、苦しげなクラモリを見下ろし、レキから目を逸らせたまま、硬い表情で

ネム「クラモリがしんじゃったら、あなたのせいだから！」

レキ、打ちのめされた表情。

▲このシーンの空の色はきれいだった。

● ゲストルーム (数時間経過)

陽は暮れている。薄暗い部屋。看病を続けているネム。  
レキ、ネムの顔を窺うように、戸口に立っている。手  
には大荷物。

レキ「……あの、食べ物、買ってきた。おなか、減ってるかなっ  
て思ってた……」

ネム、立ち上がり、レキの荷物を持ってやる。

ネム「一緒に作ろう」

ネム、レキに背を向け、キッチンに向かって歩きながら

ネム「さっきはごめんね」

ばつの悪そうなネム。レキ、驚き、次いで泣き笑いのよ  
うな表情。

● ゲストルーム (夜)

目を覚ますクラモリ。食べ物の匂いに気付き身を起こす  
と、すぐ傍らに椅子を並べて、レキとネムが手を繋いだ  
ままベッドに倒れ込むようにして眠っている。ベッドサ  
イドのテーブルに盆に載ったお粥の器。まだ湯気を立て  
ている。クラモリ、眼を細めて微笑み、二人の髪を撫で  
てやる。

クラモリ「よかった……」

● ゲストルーム

数ヶ月経過。掃除をしている3人。レキの羽は見た目は  
良くなっている。

レキ「いいのかな?ここ、私には広すぎるかも……」

クラモリ「じゃあ、ここ、ゲストルームって事にしない?それで、

レキはここに住んで、新しく来た灰羽の世話をするの。それ  
がレキの仕事」

レキ「……いいの?」

▲このあたりの一連の流れも、自分の頭にあった映像ととても近い。これだけ大人数で作っているのに、これだけの文章を手がかりに、僕の思っていたものに近いものができるというのはすごい事だなあと改めて思う。

▲お粥、としていますが、本編ではもっとちゃんとしたものを作ってますね。たしかに、お粥だけだと、絵的にこのシーンの情感を象徴できないかも。

ネム「いいんじゃない。手が空いてる時は子供達の世話をしてもいいし」

レキ、目を輝かせ

レキ「私、頑張るよ」

クラモリ、優しい微笑み。

クラモリ「……………レキも、もう一人前だね」

レキ、灰羽になって初めて見せる、屈託の無い笑顔。フェードアウト。

●レキの部屋。アトリエ。（現在）

薄暗い部屋の隅、壁際に座っているレキ。片方の膝を立てて、そこに手を置き、額を預けている（部屋の中は見せない。このシーンではどこだか分からなくても構いません）。閉じた瞼が苦しげに震える。小さな呟き。

レキ「……………クラモリ……………消えないで……………」

レキ、わずかに目を開く。夢と現実の狭間にいる。脆く無防備な、子供のような表情。

レキ「……………傍（そば）にいるって……………約束したのに……………」

カメラ、やや引く。投げ出されたレキの足元には絵の具で汚れた大きな刷毛が転がっている。その傍には絵の具の積まれたスチール製のワゴンがある。床は絵の具で何か描かれているが、壁際はまだ剥き出しの石の床（コンクリート？）なので、何が描かれているかは分からない。レキ、顔を上げ、どっと壁にもたれる。煙草を採り出し、一服。すっ、と眼に鋭さが戻る。

レキ「ラッカ……………（はっとして）しまった！」

●ゲストルーム

早朝、陽の出前。ベッド脇の椅子に座り、手持ち無沙汰のカナ。ドアの開く音に振り返る。レキ、速足で入ってくる。

▲ゲストルームのイメージは、この物語を描き始めたとき、ほぼ最初に浮かんだ。しかし、どういう経緯でこの部屋はゲストルームになったのかについてはかっちりとした設定はなかった。クラモリも、最初のプロットでは存在していないキャラクターなので、ここでこういう形でずっとゲストルームの生い立ちが決まってくれて良かった。こういう、意図していなかったもの同士が、あたかも最初から伏線を張っていたかのうようにきれいに繋がる、という事が、この作品ではよく起こった。

▲レキがどこからかタバコとライターを取り出している。そういえば、当時助監督だった大森さんが、芝居に必要だから、とボケットを設定してくれていた気がする。「採り出し」は『取り出し』の誤植です。すみません。



レキ「容体は？」  
カナ「よかった。起こしにいかうか迷ってた」と

レキ、ラッカの額らあてられたタオルをのけて、熱をはかる。ベッド脇の小テーブルに錠剤の瓶が載っている。

レキ「薬は？」

カナ「飲ませたけど、熱が引かないんだ。陽が昇ったら医者に連れていこうかと……」

レキ、戸口に向かって駆け出す。驚くカナ。

カナ「どこへ……」

レキ「すぐ戻る！」

●街への道

朝靄の道。スクーターを飛ばすレキ。寺院への脇道の手前にスクーターを乗り捨て、崖沿いの道を駆けてゆく。

●寺院、中庭

中庭の四阿。ばん、と荒々しく扉の開かれる音。話師が四阿から姿を現すと、ずかずかと速足で歩いてきたレキはもう目の前までやって来ている。レキ、話師に向かつて片手の親指で自分の口を指し、苛立たしげに指を上下に振る。レキの背後から、連盟員が二人、鳴子を手に狼狽して駆けて来る。話師、それを手で制し、手話で何かを伝える。鳴子を掲げ、不服そうな連盟員。顔を見合わせ、結局引き下がる。話師、軽く嘆息してレキに向き直り

話師「許可する」

レキ、間髪を入れず

レキ「熱を出すとは分かっていて、どうしてラッカを放り出すような真似を！」

（ひょうこ）

話師「オールドホームにはお前がいるのでな。何かあれば、氷湖（ひょうこ）の時のように、またお前がここに来るだろうと思っただ」

▲カナ、薬を買いに斥かされて、買った薬が効かなくて、と、このあたりえらい貧乏くじですね。普通だったらレキは一言礼を言っていると思う。余裕のない事を表すために、つけんどんな会話にしている。

▲このあたりのやりとりで、話師とレキの距離感、というか問題児と忍耐強い先生のような関係性を少し匂わせたかった。最終的にはほとんど描かれていないが、話師は過去に、レキにこの後のラッカのように尤箱を採取する仕事を任せようとしていた。話師という役割は徒弟制ではないけれど、話師はレキに比較的良好な話をし、どこか師弟のような関係の時期があった、というようなエピソードが、ぼんやりとだが構想の中にはあった。

レキ「ヒヨコの話なんていい。ラツカを治して！壁を汚（けが）し  
たわけでもないのに、あんな……」

話師「壁は絶対だ。私にはどうする事もできない」

レキ、やや落ち着きを取り戻す。

レキ「壁は良い灰羽を護るんじゃないの？ラツカはもう罪憑きじゃ  
ないはずだ」

話師「たとえ良き灰羽でも壁に触れば罰を受ける。………確か  
にラツカは試練を乗り越えたが……」

レキ「………やっぱり、そうなんだ」

話師「………ラツカには鳥と言う助力者がいた。いずれ罪の輪から  
抜け出す道も見出（みいだ）すだろう」

レキ「（はっとして）ラツカにも………私と同じ謎掛けを？」

話師、頷く。

レキ「ラツカは………答えを見つけたの？」

話師「それは分らん。だが、鳥がラツカに赦（ゆる）しを与え、  
故にラツカの罪は消えた」

レキ「………そう」

話師「お前が灰羽としてここに居られるのはあとわずかだ。心構え  
をしておくがいい」

レキ「罪憑きには巢立ちの日は来ないんだろ？私はここにいますよ。」

子ビ共の世話もあるし」

話師「それを決めるのはお前ではない。巢立つ事ができないまま時  
が来た灰羽がどうなるか………お前は知っているはずだ」

まっすぐにレキを見据える話師。レキ、その視線を受け

止める事が出来ない。

話師「お前はお前の試練に打ち勝つしかない。巢立ちの日は良き灰  
羽の元に平等に訪れるものだ」

レキ「どこが平等だ。クウは一番幼かったのに」

話師「だが、壁を恐れていなかったし、自分が壁を越えれば、皆も  
すぐにやって来ると思っていた。クウは皆の手本になるのが

夢だった」

レキ「何故分かる？」

話師「私は何も知らない。お前が心の底で思っている事を口にした  
だけだ」

▲自分で書いておいて何ですが、なかなかうまい事を言う。物語を書いていて時々思う事  
ですが、書き手である自分は、話師のように考える事はできないのに、話師というキャラ  
クターは作れるし、動かせるのは何故なんだろう？まあ、それが想像力という事なの  
かもしれませんが、時々不思議な気持ちになります。

レキ「……じゃあネムは？ネムは良い灰羽だ。祝福されて巣立つてゆくのにふさわしい」

話師「ネムはお前の巣立ちを見届けたいと思っている。決して口には出さないが、自分よりお前の身を案じている」

レキ「私が……ネムの重荷になっていると？」

話師「そうではない。それはネムの問題で、お前の責任ではない。

だが……そういうことだ」

レキ「……」

話師「もうゆけ。ラッカが待っている」

レキ、はたとする。

話師「必要な薬草は勝手に摘んでいけ。種類は分かっているはずだ」

話師、レキに背を向け、中庭の出口へ向かう。ふと立ち止まり

話師「お前は常にラッカの支えとなった。お前の振る舞いは正しい。

だから、先へ行くラッカを嫉んではいけない」

レキ「嫉む？私が……ふざけるな！」

話師、四阿（あずまや）を立ち去る。唇を噛み、立ち尽くすレキ。

9

●ゲストルーム

ゲストルーム。レキ、食卓の椅子に座り、播鉢（すりばち）で薬草を搗り潰している。テーブルの上には積まれたばかりの薬草が置かれている。ヒカリ、やかんを持ってキッチンから出てくる。

ヒカリ「お湯、沸いたよ……。な、何このにおい」

ヒカリ、片手で鼻を覆い、顔をしかめながら、テーブルにやかんを置く（テーブルに鍋敷きのようなものが置いてあります）。

レキ「ありがと」

レキ、播鉢の中のどろどろした緑色の物体を湯飲みに入れ、やかんの湯を注ぐ。鼻を押さえてあとずさるヒカリ。

ヒカリ「（鼻声で）ほんとに効くの〜？」

レキ、ベッドに横たわりうなざれているラッカの元へゆき、枕と頭の間を手を差し入れて頭を傾け、湯飲みを軽

▲このシーンは延々とセリフが続くのですが、引いた絵と顔のアップと回想とをうまく使って持たせてもらいました。でも、連盟胃が鳴子を持ってやってくる下りを少しあとに持ってくるとか、鳴子をレキが受け取って、それを手に持っている事で、手のアップのカットが使えるようにするとか、僕の方で間を持たせるための工夫をするべきでした。

▲細かい。

▲ちょっと仕草を細かく指定しすぎているかもしれない。

く吹いて、ラツカの口にあてる。  
レキ「熱いから気をつけて」

ラツカ「一口飲み、眉を歪める。」

ラツカ「……苦い」

レキ「薬だからね。我慢して。もう一口」

ラツカ「うえ……」

なんとか薬を飲み下すラツカ。レキ、不安げな表情を消  
させないまま立ち上がる。ヒカリ、ラツカの傍に寄り

ヒカリ「良くなるといいね」

なんとなく頷く一同。

●中庭

昼下がりの中庭。良い天気。洗濯物がはためいている。

お揃いの外套と羽袋の子供達、物干し竿を引っかける鍵  
のついた棒を使って、器用に物干し竿を低い位置に掛け  
直し、洗濯物を取り込んでゆく。

子供A「わー、シートが地面に着いちやう」

子供B「ちゃんとはじっこ持てよ」

水道台にもたれて、そんな光景をぼんやり見ているレキ。

銜えた煙草からふらふらと煙が上っている。ダイ、シヨ  
ータ、ハナが寄ってきている。レキ、ハナに袖をひっぱら  
れ、やっとなんかお話しして。

ハナ「レキ、元気ないの？」

レキ「……先生はね、ちよつと寝不足」

ダイ「ラツカは？ずつと寝てるの？病気？？」

レキ「ん……大丈夫。もう治ったから……」

ハナ「ねー、なんかお話しして」

レキ、気のない様子でハナの頭を撫で

レキ「あとでね……」

ハナ「(不服そう) えー」

シヨータ「じゃ、なぞなぞ」

レキ、苦笑い。

レキ「なぞなぞは苦手。……ホラ、みんなを手伝いな」

▲本線と関係ない日常描写でしたが、細かく書きすぎているので、本編では適度にまとめられていきます。『なぞなぞは苦手』からあとのやりとりはちよつと残したかったのですが、それを入れようとするとかなり長くなってしまっただけで流れが止まってしまいますね。

ダイ「つまんないの」

駆けてゆく三人。レキ、眩しそうにそれを目で追う。いつの間にか寮母が隣に立っている。

寮母「子供達も、だいぶん手間がかからなくなってきたね」

レキ「……ああ、そうかもしれない……」

寮母「ラッカが倒れてから、ろくに寝てないんだろ？少し休みな。

紙みたいに生っ白い顔してるよ」

レキ、ふっと、どこか寂しげな笑い。

レキ「見てたかったんだ。子供達の事……」

寮母「毎日いやってほど見てるだろ」

レキ、今の気持ちをどう言葉にしているか分からず、かすかに自嘲めいた笑みを浮かべたまま佇んでいる。カナが正門から駆けて来る。

カナ「レキ！掲示板に、連盟が……！」

●正門アーチ内、掲示板前

どん、と拳を壁に叩きつけるレキ。掲示板には連盟からの通達が張られている。朱と黒で縁取られたものらしい書面。レキ、書面を読み上げる。

レキ「……灰羽・落下、本日中に灰羽連盟寺院へ来るよう申し渡す。壁に触れた咎（とが）に因り、罰を与える……」

カナ「どうする？」

レキの剣幕にちよつと引いているカナ。レキ、吐き捨てるように

レキ「放っておけばいい。責任は私が持つ。あいつらにラッカを罰する権利なんて……」

ラッカ「レキ」

西棟から出てきたラッカ。古着屋で買った冬服の上に着を着て、話師の杖を持っている。ヒカリとネムが、心配そうに後からついてきている。レキ、ラッカに駆け寄る。

レキ「ラッカ！まだ起きちゃ駄目だ」

▲寮母のばあさん、この話数で唯一の出番だったのですが、残念。

ラッカ、首を横に振り、心配かけまいと微笑んで見せる。ラッカ「杖を返しにいくつて約束したの。平気だよ。熱も引いたし。それに、なんだか……（羽を羽ばたかせ、軽く背伸びをして見せる）羽が軽くなったみたい」

レキ、ラッカの正常に戻った羽の事を思い出す。無意識にラッカの羽を見つめている。言葉を継ぐ事が出来ないレキ。ラッカ、逆にレキを元気づけるように

ラッカ「レキの薬が効いたんだよ。ありがとう。みんなも、心配かけてごめんね」

ラッカ、アーチの端でみんなに向かつてべこつとお辞儀をし、やや速足で去ってゆく。カナ、『レキは心配すぎなんだよ』という感じで、ぼん、とレキの肩を叩き、オールドホームに戻る。ネムとヒカリもほっとした様子で後に続く。去ってゆくラッカを目で追いながら、ひとり立ち尽くすレキ。

●灰羽連盟、寺院

話師とラッカ、いつもの中庭ではなく、部屋がある寺院外周部の回廊を歩いている。円形の蛍光灯が、剥き出しのまま壁に掛けられ、薄暗い光を放っている。無言の話師。やや不安げなラッカ。鳴子はつけていない。杖は話師が持っている。半周回って一番奥に、建物の外に向かった壁に扉がある。二つの頑丈な鍵を開け、扉を開く。鉄のスライド扉。底面に車輪があり、重たい音を立てて扉が開く。ガゴン、と音を立てて扉が止まると、かすかに埃が立つ。人ひとりがかすたと通れる幅の、急な勾配の下り階段が続いている。暗くて先は見えない。

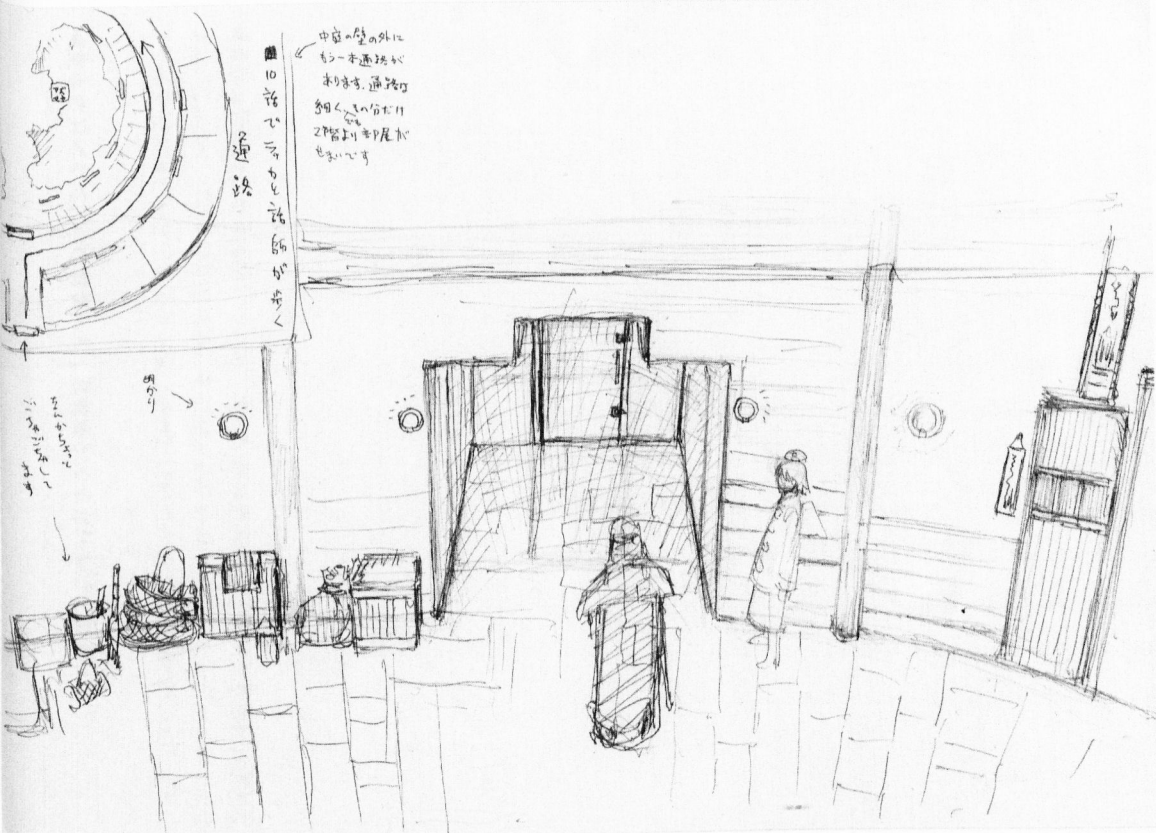
話師「降りなさい」

ラッカ、恐る恐る階段を下りてゆく。

●地下

階段はやがて螺旋を描き、それを降り切ると、やや広い

12



●地下通路の入り口周辺。通路には色々物が置いてあって、それなりに生活感がある。

話師「こちだ」

通路に出る。くすんだオレンジ色石を削り出しただけの荒い石壁に、ところどころ木で出来た支柱がある。天井は低く、湿っていて、どこからか水の滴る音が聞こえてくる。坑道か、カタコンベのような雰囲気。回廊にあったのと同じ、薄暗い蛍光灯が壁に数ヶ所かけられているため、完全な闇ではない。ラッカは不安そうに周囲を見渡し、寒さにぞっと震える。話師も降りてくる。ドアの近くの壁に、無造作にレインコートのような外套が6着並んでかけてある。汚れ方に差があり、中には酷く古びたものもある。フードと羽袋、袖と一体化した手袋があり、顔と足元以外の全てを覆っている。話師、杖を置いてそのうちの真新しい一着をラッカに渡し、自分も一着取って羽織る。厚手の耐水性の生地だが、素材は良く分らない。サイズは大きく、コートを着たラッカでもずいぶん余裕がある。羽と手袋を通すのに四苦八苦するラッカ。

●地下通路

曲がりくねりながらどこまでも続く通路。ラッカ、話しかけようとするが、鳴子が無いため、どうしていいか分からない。話師、それを察して

話師「ここでは声を発して構わない」

通路は長い上り階段に差し掛かる。

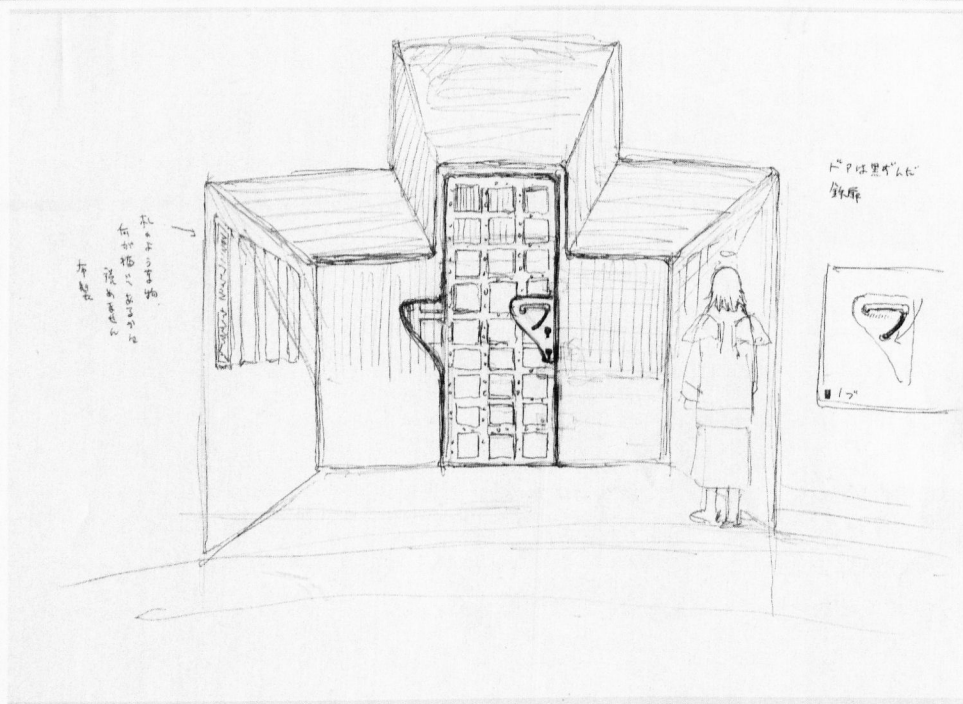
ラッカ「……私は、牢屋に入れられるんですか？」

話師「牢屋？」

ラッカ「だって……」

ラッカ、辺りを見回す。確かに地下牢があってもおかしくない状況である。話師、かすかに息を吐く。笑ったようにも見える。階段を登り切ると、入り口と同じ扉。話師、同じように二つの鍵を開け、扉を開く。扉を抜ける

▲外套がなぜ6着だったのかは謎。何かぼんやり考えていた気もするのですが、思い出せません。ここに、レキが着るかもしれないなかった一着を何か分かるように書くうか迷った記憶があります。結局、ラッカが着ている新しい外套が、レキのためのものだったかもしれない、という含みはなくてもいいが、この時点でその線を彫らまさせてしまうと、レキの過去話の比重が大きくなりすぎるので自重しました。



■地下通路入り口の設定画。本編では一瞬しか出ませんでした。この扉自体ももっと奥まった場所に設置したかったのですが、建物の丸い外観が決まっているのでこれが限界でした。

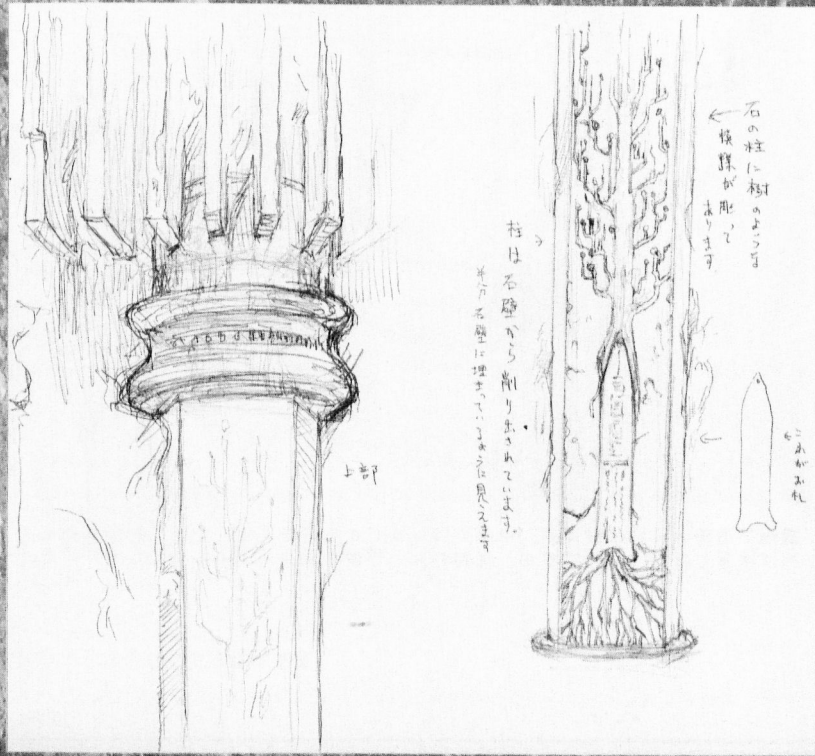
ちよつとこちゃ  
ついで、スケール  
感が無くなるので、  
適度に整えて下さい。  
おねがいします。

ディテールは  
不規則にしてい  
ますが、ある程度  
パターンがあった  
方がいいですよ。

画面右の柱は  
いらなかも……。



■壁の中。最初は水路ではなく、中央の溝にレールが敷いてあって、トロツコのような物に乗って移動する設定でした。レールという設定がミスリードを招きそうなので、話師がレバーをきこきこして移動するがどうにも間抜けなので色々考えているうちに水路と筏（いかだ）になりました。右はお札と札の埋め込まれている柱。



石の柱に樹のよう  
な模様を彫り  
こめよう

柱は石壁から削り出さず、  
半分石壁に埋まっています。\*は見えません

こめかみ札



画 2002 0913 壁の中, 名札前



△前より出しかけの  
おろ感じ

話師。ラツカも後に続く。中を見るなり、声を上げるラツカ。

ラツカ「わあ……………」

●壁の中

ラツカ「ここは……………」

話師「壁の中だ」

ラツカ「壁の……………」

そこは街を囲む壁の中。壁が中空になっており、街を一巡する広大な回廊になっている。寺院の背後の崖の基部から地下通路を伝って、壁の中に入った事になる。回廊の道幅は7メートルほど、天井は闇に溶け込んで確認できない。道の中央の一段低くなった部分が水路になっていて、細い鉄の手すりで囲われた、筏（いかだ）のような乗り物が回廊の杭にロープに繋がれ、浮いている。筏にはモップと雑巾と思わしき紋様の入った布と水を張ったバケツ大の金属の器が載せられている。手すりには布の袋が下げられている。話師に促され、恐る恐る筏に乗るラツカ。話師はそれを確認すると筏を繋いでいた綱を解く。僅かに水流があるらしく、ゆっくりと進み出す筏。話師、壁に掛けられていた長い木の櫂（かい）を取り、筏に乗る。櫂といっても、複雑な機構はない。単なる竿。話師、筏の後部に立ち、櫂で水底をぐっと押しやるように突いて筏を進める。かすかな水音を立てながら、滑らかに進んでゆく筏。

14

話師「あれを見る」

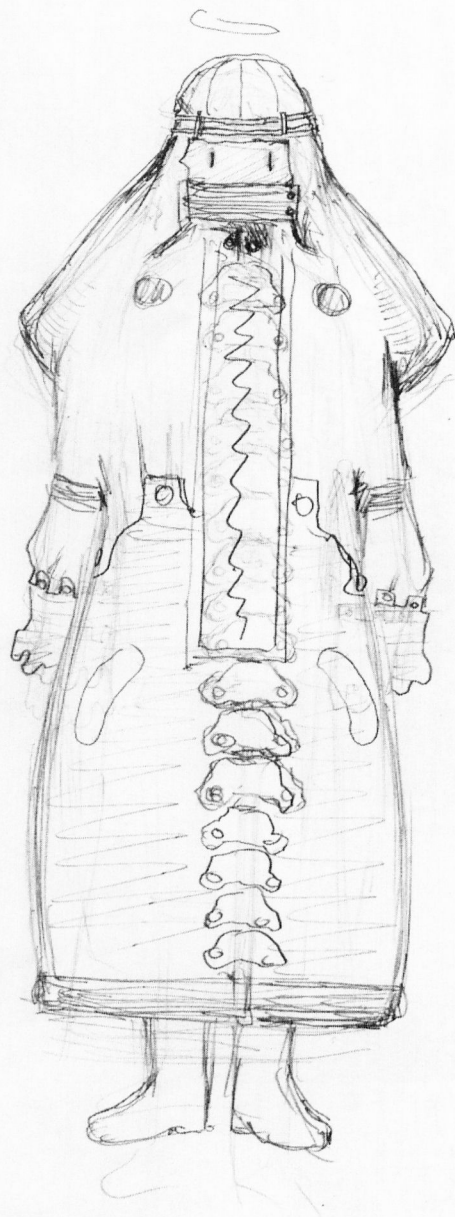
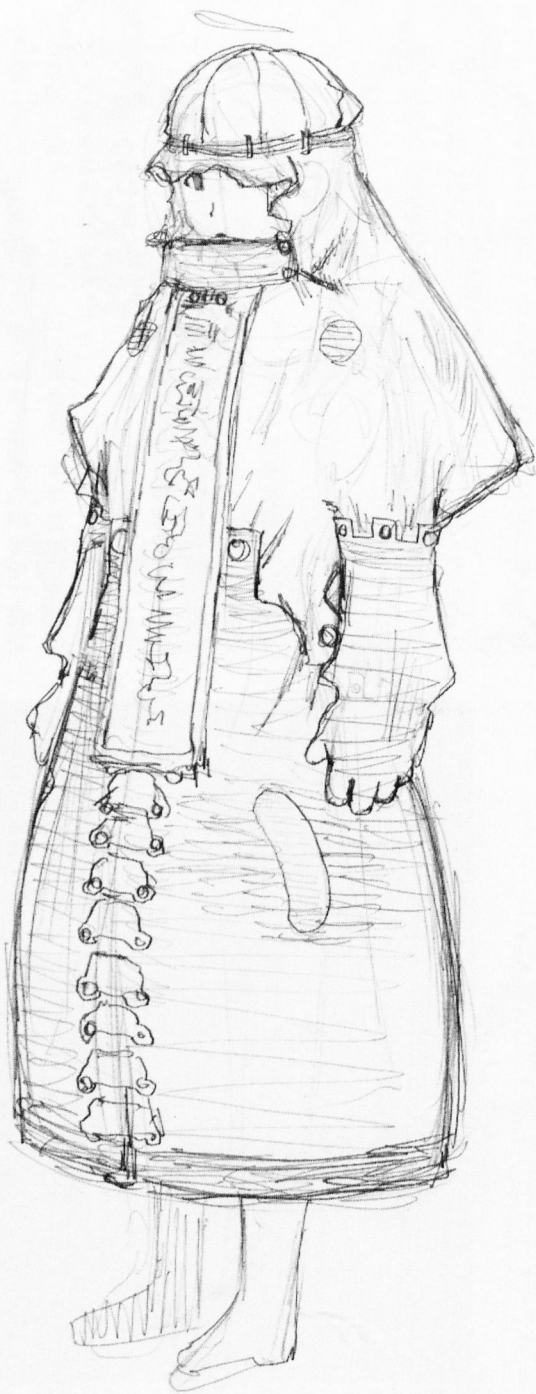
回廊は、人工的に舗装された部分と、自然の鍾乳洞のような部分が交互に続いている。舗装された部分は、灯がある。未舗装の部分には、壁の両側に、文字のようなものが刻まれた札が並んでいる。札はところどころ抜けがあり、新しいもの、古いものがでたらめに交じり合っている。静謐な空気。不思議な空間。回廊は緩やかなカーブを描いてどこまでも続く。

回廊の通路

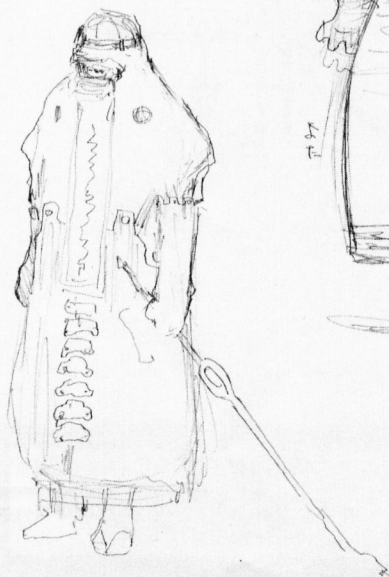
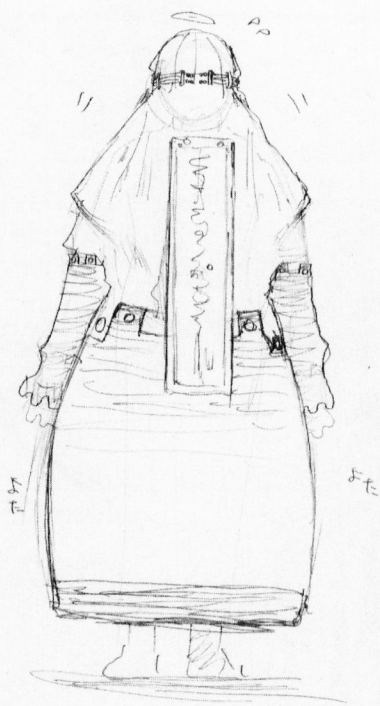
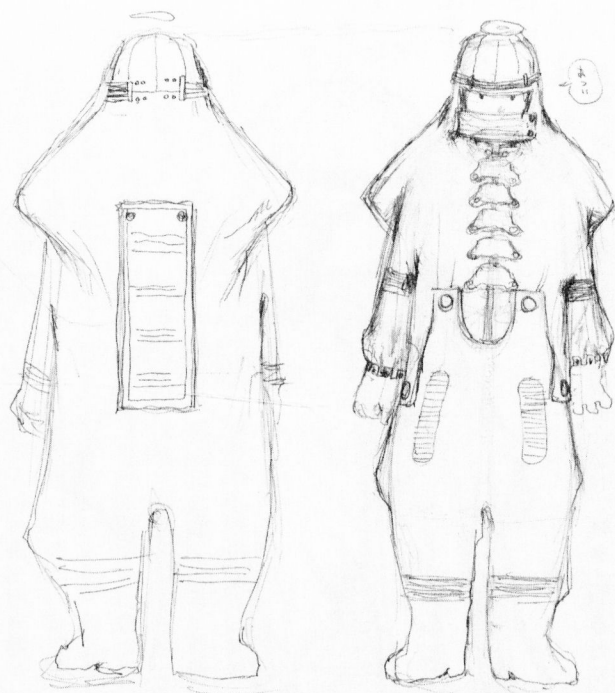
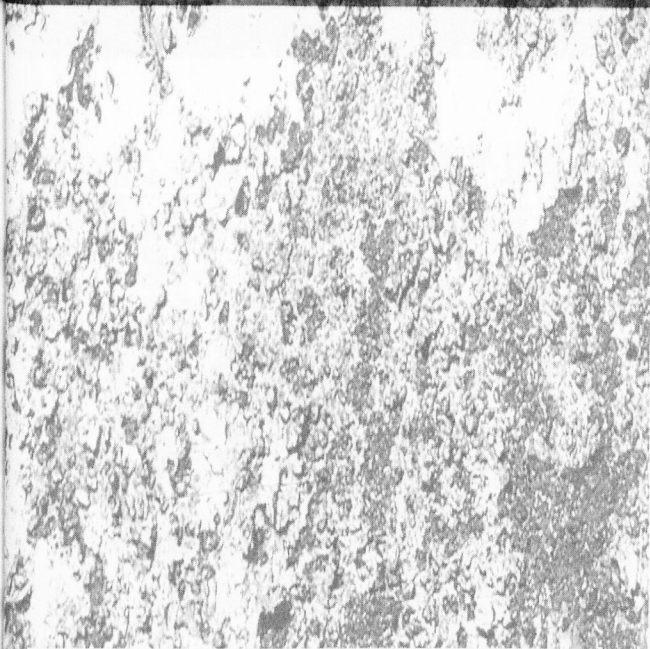
基本の1は  
おぼろげな  
単独の柱で  
壁のしぼり  
あつた、  
湿った、冷たい空気の  
の若さ



■ちょっと順序が逆ですが、扉を開け、階段を下りた所の通路。フランスのコンベンションに招かれた時に見学したカタコンベがモチーフになっています。カタコンベは膨大な数の人骨でできた地下通路で、左右の壁がびっしり頭蓋骨だったりして、冷静に考えるとどんなでもない光景なのですが、人骨もあれだけあると逆に恐怖は感じないですね。



■この防護服は、どうしてこんなデザインになったのかよく分らないまま、気づいたらこんな風になっていました。上田さんはキングゲイナーみたいだ、といていたけど、観そねたのでよく分かりませんでした。後日、何かの機会にオーブニングだけ観たのだけど、別に似てないと思うけどなあ……。ロボットじゃなくて、裾の広がったスカートみたいな衣装のキャラクターの事だったかもしれないけど、どちらにせよあんまり似ていないと思う。……似てますかね。



■防護服ボツ案。こちらの方が後に描いて、結局最初に描いた方を採用しました。今見ても第1案のスカートの方がいいように思う。どうして別案を出しかのかよく憶えていないが、あるいはキングゲイナーっぽいといわれたのを気にしていたのかもかもしれない（いや、でもそんな記憶はないなあ……）。

●壁の中

話師、前方の壁を指さす。霜がつくように壁や名札にうつす光るものが付着している。話師、襦を筏の上に置く。筏は緩やかに速度を落とす。話師、定期的に立てられた杭の一本に筏を留める。話師、手すりに下げられた袋から、ガラスの瓶とピンセットのようなものを取り出し、ラッカに渡す。筏から降り、発光する札の前に立つ話師とラッカ。

話師「これは光箔（こうはく）という。お前達の光輪のもとになるものだ。お前はこの回廊を巡り、箔を集め、錆びた札を清めて回る。それがこの街でのお前の仕事となる。重要な役目だ。出来るか？」

ラッカ「ひ、ひとりですか？」

話師「怖いかな？」

ラッカ「やりませう」

話師、頷き、筏に乗り、綱を解く。水音。話師の声が遠ざかってゆく。

話師「後で迎えにこよう。何があつてもそのロープを脱いではならない。もしも何かが見えたり、聞こえたとしても、恐れる事はない。それが何であれ、ロープを身につけた者に触れる事は出来ない——」

ラッカ「な、何か出るんですか………？」

返事はない。モップを片手に、途方に暮れるラッカ。

ラッカは作業を続けている。モップで床を拭き、布で古い札を拭く。布を器の水で洗い、それが済むと光箔を探りにかかる。ピンセットで光箔を挟むと、文字通り箔を剥がすように、恐ろしく薄い膜状の発光体が札から剥がれる。ほんの数ミリ四方ずつ、こつこつと光箔を剥がし、ガラス瓶の中に落としてゆく。名札には読めない文字。良く見ると、文字は人の手の形を模したようにも見える。ラッカ、文字の形を手で真似

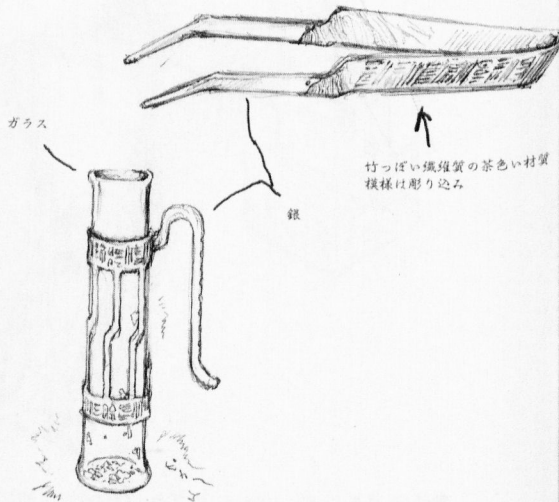
2002.10.03 6:54 PM

▲去ってゆく話師が何故か笑える。



■ピンセットと、光箔を集めるガラス。今見ると、筒状のガラスが金属部分かどうやう固定しているのかか気がなってしまう。今だったら、金属部分の下の方を、ガラスの底の部分まで伸ばすかどうかして、落ちづらいようにすると思う。でも、逆に最近そういう細かい理屈を気にしすぎて、発想が縮まっている気がする。

左は、ポツ案の方の防護服がハンガーにかけてある状態。



ラッカ「これ……きつとトーガと話師が話をする時の文字だ」  
遠くから、筏の水音がかすかに近づいてくる。振り向き、  
暗い水路の先を見つめるラッカ。

●寺院へ続く道

夕暮れ。オールドホーム、街、寺院への道が交差する、  
橋のある三差路。いつの間にか雪が降り始めている。風  
はなく、雪は静かに道や木々の上に積もり始めている。  
空は夕焼けにならず、灰色のままゆっくりと暗くなつて  
ゆく。街の方から三差路に向けて、人影がふたつやつて  
くる。ミドリとヒヨコ。傘は差していない。

ミドリ「だあーかあーらあー、なんで私がこんなことしなきゃなん  
ないのよ」

ヒヨコ「じゃあねえだろ！オレ南地区へは行けねえんだから」

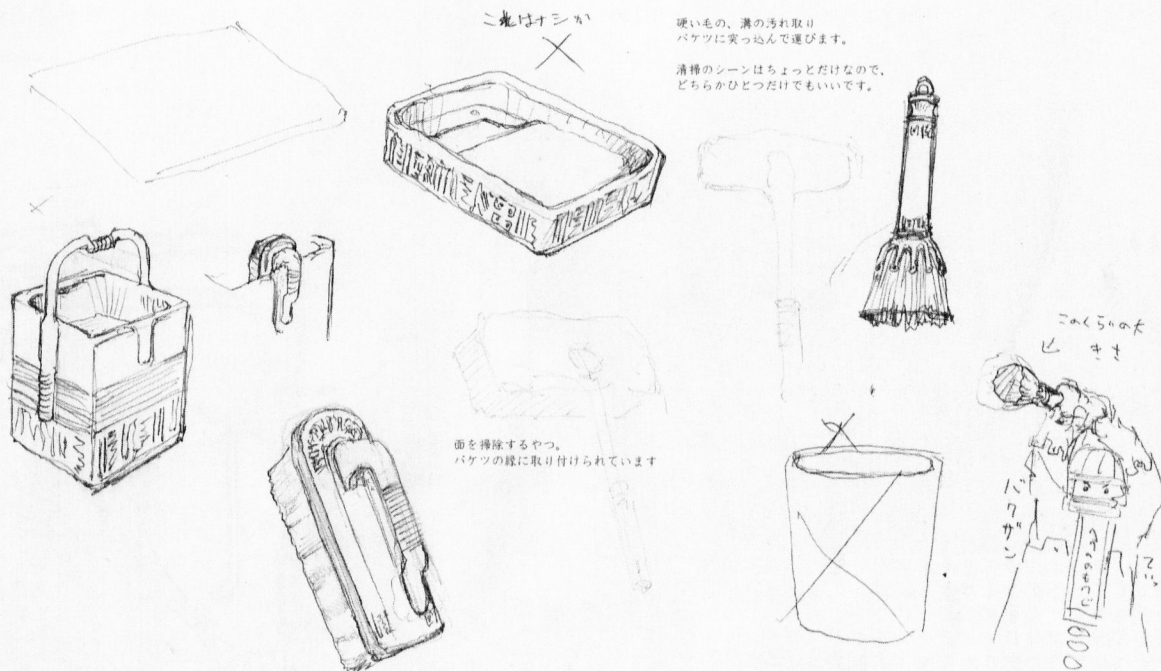
ミドリ「じゃあついて来なくてもいいじゃん。……ほんとに偶  
然レキに会えたらなーとか思ってたんでしょ」

ヒヨコ「けっ！（掌を上に向けて空を仰ぎ）あーあ、お前がうっさ  
いから雪ひどくなつてきちまつたぞ」

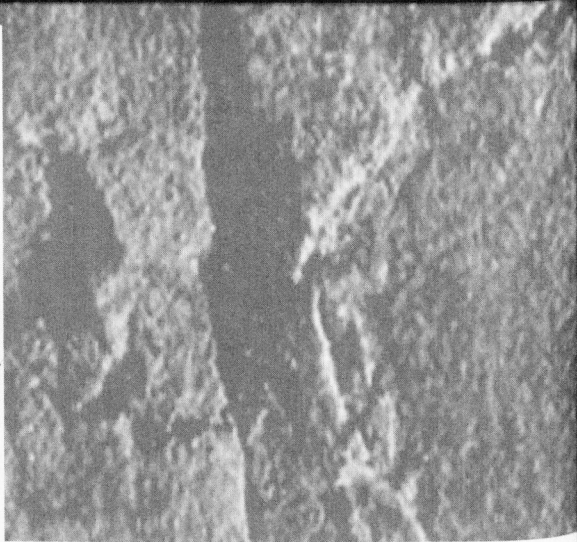
ミドリ「（頭にきて）人のせいにすんな！（手にしたかわいらしい  
柄の布で包んだバスケットを誇示し）これだって全部あたし  
に作らせて！ひとりじゃなんつっにも出来ないくせに」

ヒヨコ「（インネンつけるチンピラのような感じで）あああ？俺が  
いつ……」

前を向くヒヨコ。川を挟んだすぐ向こうからレキが歩いて  
きている。傘を差し、もう一本傘を手に持っている。  
ヒヨコ達の会話は少し前から聞こえていたらしく、啞然  
とした顔をしている。ミドリとヒヨコもレキに気付く、  
あんぐりと口を開けている。川と橋を挟んで、向き合う  
3人。何だか間の抜けた絵。ヒヨコ、レキから目を逸ら  
しつつ、ミドリのわき腹を肘でつつく。むつとするミド  
リ、だが、バスケットを抱えて、ずかずかと橋を渡つて  
くる。レキの目の前で仁王立ち。



■清掃用具設定。バケツとブラシが何気に便利そう。アニメーターさんたちを見習って、何気に定規を使っている。西友で売っていた風呂掃除ブラシを参考にしました。



■ミドリ設定。5話の頃に描いたので、まだ夏服のイメージです。冬服のコートは、ボンボンをつけようと思っていたのですが、設定が間に合わなくて、キャラクターデザインの高田さんにおまかせにしてみました。ボンボンは結局ラッカの冬服の靴につく事になりました。……あっ、ラッカの冬服と靴の設定画がない！

ものすごく捜しましたが、発見できませんでした。今思い出しましたが、ラッカの冬服は、家で描いている暇がなくて、美術設定の打ち合わせでラディクスにいる時に、誰かが少し遅れて来て、その人を待っている間にメモ帳に描いてそのまま提出してしまっただけです。

ほぼそのままなのですが、ちょっと地味だったので、前ボタンのところに白いラインをいれました。アップ時は線が二本、というような指示をしたかもしれませんが。この頃はかなりせっぱ詰まってきました。



■ミドリ表情集。どうでもいいけど、確かミドリの設定画のどれかに、胸に矢印を引いて『かわいそうなくらいべったんこでよろしくお願いします』と指示を出した記憶がはっきり残っているのだけど、今見返したらなかった。紙に描いたのではなく、添付したメールにテキストでつけたのかもしれない。

あと、企画当初、監督から漫符（怒った時の青筋とかがっかりした時のでかい汗マークとか）を入れていいか、と聞かれて、『今回はシリアスだから絶対ダメです』と言ったのに、設定画でこんなのを描いてしまって、『自分がやってんじゃねーか』とすごいっこまれてしまいました。監督的には、わっかを見た瞬間これをやりたいと思ったらいいです。



ミドリ「あんたんとこに、変な癖っ毛の子がいるでしょ」

ミドリ、自分の髪を一つまみして、ゆらゆら振って見せる。レキ、ああ、と頷き

レキ「ラツカの事？ラツカがどうしたの？」

ミドリ「どうだっでいいでしょ！とにかく、氷湖（ひょうこ）がこれ渡してっ」

ミドリ、レキに無理やりバスケットを押しつける。何が何だか分からないレキ。

レキ「なに、これ？（開けようとする）」

ミドリ「わーっ！開けちゃダメ！」

レキ、きよとんとする。ミドリ、ちよつと赤面して狼狽しながら

ミドリ「と、とにかく黙って渡せばいいのよ！」

ふりふり怒りながら立ち去ろうとするミドリ。

レキ「ミドリ」

きつ、と振り返るミドリ。レキ、持っていた方の傘を差し出す。

レキ「これ。風邪引くよ」

ミドリ、じとーとした目でレキを睨み、だが数歩戻って、ひったくるようにして傘を受け取る。礼も言わず、

憤懣遺る方無しといった表情でレキに背を向けるが、ちらつと振り返り

ミドリ「レキ、煙草やめなさいよ。馬鹿みたいよ」

今までの喧嘩腰とは違う、冷めているが、どこか親しい口調。返事を待たず背を向け、傘を開きながら木陰にも

たれて身を隠していたヒヨコに向かって

ミドリ「帰るわよ！」

ヒヨコ「命令すんな！」

レキ、去ってゆく相合い傘の後ろ姿を微苦笑で見送る。ヒヨコ、突然振り返り、レキに向かって拳を突き出し、

親指を下に向ける。レキ、かちんと来て

レキ「にやる！」

ヒヨコに向かって中指を突き上げる。

ラツカ「どしたの？」

▲それで通じるんかい……

▲会話の流れとか、細かいニュアンスで、何とかレキとミドリ、ヒヨコの過去の人間関係を匂わせたくて、色々細かく書いています。こういうちよつとしたやりとりの積み重ねで、これ以後出てくる過去話に厚みが出てくれるといいなあという気持ちと、この時点では自分自身がまだレキたちの過去について完全に把握していないので、書きながらそれを探っている感じです。

崖沿いの道を歩いてきたラッカ、いつのまにかレキのすぐ傍に來ている。レキ、転びそうなほど驚き、慌てて手を引つ込める。

レキ「うわあ！な、何でも無い何でも無い」

ラッカ、目深にかぶったフードにも肩にも雪が積もっている。レキ、それを払ってやりながら

レキ「ごめん、迎えに行くつもりだったのに馬鹿につかまって。あ、その馬鹿がこれラッカにつて」

ラッカ「??」

レキにバスケットを渡され、きよんとするラッカ。

レキ「そうだ。罰ってなんだった？ひどい事されなかった？」

ラッカ「ええと……寺院の掃除。（にっこり笑つて）私の仕事だつて」

レキ「そおじい？（拍子抜けして）……あーあ。世の中馬鹿ばかりだ」

肩をすくめるレキ。ラッカ、笑う。

●ゲストルーム

夜のオールドホーム。ゲストルームの食卓に集まっている一同。バスケットの中身は手紙と、一口サイズの洋梨のタルト。

ヒカリ「すっごーい」

ネム「ひいふうみい……、寮母のおばあさんと子供達の分までちゃんとおある。礼儀正しいわねえ。見直しちゃった」

ラッカ、同封されていた封筒を開けて『なんだこりゃ』という顔。カナ、手紙を覗き込み、吹き出す。手紙には

便箋一杯に殴り書きの文字で一言『スープレのワビ』。

カナ「なにそれ？うっわ。あつたまわるそ〜」

便箋はもう一枚ある。そちらは几帳面な女の子らしい丸文字で『オールドホームのみなさんへ……』で始まる丁寧な手紙。ラッカへの私信ではなかったので、みんな手紙を覗き込んでいる。ヒカリ、居ても立ってもいられないといった感じで

▲このあたりは、今までに出てこなかったレキの一面。オールドホームではリーダー的な役割を自分に課しているために、感情を前面に出す事があまりなかったが、廃工場にいた頃は、もう少し素の自分が出ていたのだと思う。

ヒカリ「わあ、なんかお返し考えなきゃ」  
 カナ「いいんじゃないの？お詫びっていつてんだから」  
 ヒカリ「そんなことないよお」  
 ネム「レキ、どうする？」

レキ、いつの間にかひとり食卓を離れ、タルトを食べずに手に持ったままベランダのドアにもたれて外を眺めていたが、ネムの言葉に振り返り

レキ「どうするって……私は別に……」

ネム「これ（食べかけのタルトを持って）、レキが教えたんでしょ？」

ヒカリ「（タルトを一口食べ）あ、ほんとだ。レキのレシピだ」

ラッカ、怪訝そうにレキを見る。レキ、ちよつとばつが

悪そうにベランダの外に向き直る。

ネム「それに、年小組の上の子、廃工場に帰るんでしょ？挨拶して

おいた方が良くない？」

ラッカ「何の話？」

ネム「廃工場では子供の面倒見られないから、小さい子はうちで預

かったたので、年に何回か、里帰りするわけ」

ラッカ「……そうなんだ……」

レキ「私は、廃工場には……」

ネム「分かっている。挨拶は私達で行くから」

ヒカリ「あ、私行きたい」

ネム「いっとくけど、あそこの男の子達、ガサツよ」

ヒカリ「えー」

カナ「（ヒヨコの手紙をひらひらさせ）………確かに」

ラッカ「私、行く」

ヒカリ「じゃ、私、お菓子作る」

ネム「（レキに向かって）それでいい？」

レキ「（気のない感じで）任せるよ」

●ゲストルーム前の廊下

ヒカリ「おやすみー」

三々五々に部屋に帰ってゆく一同。

最後に出てきたレキとネム。ネム、欠伸をしている。

▲僕はお菓子を作った事がないので、なんかこういうやりとりは書いていて恥ずかしかった。

レキ「ネム」

振り返るネム。レキ、少し思い詰めたような表情。

ネム「ん？」

レキ「私の事なら心配いらぬ。私は一人になっても平気だから」

ネム「（何の事か分からず）なに？何の話？」

レキ「私は、ネムの足手まといになりたくないんだ——」

ネム「??レキ、何の話……」

レキ、速足で階段を登って行ってしまふ。取り残された

ネム。呆然。

原稿用紙200字詰め28枚

第10話について憶えているのは、自分の中で物語が終盤にさしかかり、ぼんやりと見えてきたラストの一点に向かって、この世界のすべての要素がゆるやかに収束し始めているのだと、書きながらはっきり知覚できた事、そして、『ほんとにこれ話でまとまるの？』と、やたらと周囲に心配された事です。

全体の流れという点から言うと、この話数は、物語の主軸がラッカから、ラッカの視点で見たレキへと移行した回でもあります。

次ページからは、一応初稿を載せておきますが、この話数は2稿ですんなりOKになった事でも分かる通り、ストーリーラインはほとんど変更はなく、全体に冗長な部分を刈り込んでいた部分があるので、重複する部分が多く、あまり面白い点はないかもしれません。唯一の大きな変更点は、ラストのダイが廃工場に行く理由で、これはスタップで話し合っていて、いまひとつすんなりのみ込めないう事で、いろいろ考えた結果、最終的に2稿の設定に落ち着きました。あとは、補足文にも書きましたが、水路がトロッコになっています。

第10話 過去・廃工場の灰羽連・ラッカの仕事 (飯)

第1編 (2002.08.20)

- 登場人物
- ラッカ
- ネム
- レキ
- ヒカリ
- カナ
- トイガ(セリフなし)
- 話師
- オールドホームの灰羽の子供達
- ダイ
- シヨータ
- ハナ
- 寮母
- ヒヨコ
- ミドリ
- クラモリ

●サブタイトル

●物置き (画面に何らかの処理を加える事で、過去の出来事である事を示す。声がなく、セリフは字幕とか)

荷物の詰まった物置き。蜘蛛の巣が張り、汚れている。壁には本箱が積まされ、窓を半ば覆ってしまっている。その窓も、木の板で打ち付けられて、うっすらと光が透れているもの。室内は暗い。外は吹雪いているらしく、窓の隙間から、溜った風の音に混じって、かすかに雪が吹き込んでくる。部屋の隅にラッカの時の半分の大きさの籠がある。荷物に押され、いびつになっっている。籠の下部が割れていて、ひとりの少女がうつ伏せに倒れている。ラッカの時と同じロップのような白い籠を差しているが、ラッカより幼い。10歳前後。長い黒髪が濡れて顔に張り付いている。力なく投げ出された細い腕。その指先が離れるように震える。

●オールドホーム 中庭

早朝。中庭の北の隅にある物置き。深く雪が積もっている。瓦葺から、12歳のネムが、クラモリの手を引いて駆け下る。必死の表情で物置を指さすネム。クラモリ、重い鉄のバールを引き摺るようにして、息を切らせながら走る。

●物置き

バールで木の板を壁から剥がそうとするクラモリとネム。バキッと音を立てて、一枚の板が割れて。背伸びして中を覗くネム。その途端、短い悲鳴を上げて、クラモリにしがみつく。

荒い息を吐いているクラモリ。物置の中を覗き込む。朝日に浮かび上がった部屋の様子を呑む。

室内。部屋の隅の隅は、灰のように崩れ掛かっている。その手前の床には血まみりができ、少女がうつ伏せに倒れている。血に染まった服を覗くように、背中には灰羽の殻である羽が生えている。羽は血にまみれているが、その血の上からでもはつきりと分かるほど、黒い斑紋が羽一面を埋め尽くしている。

空を越え、血だらけの少女に駆け寄るクラモリ。服が血で汚れるのも構わず、少女を抱き上げる。うっすらと目を開ける少女。閉ざされていた少女の世界がゆっゆりと開ける。少女の目に最初に映ったのは、両の踵に涙を溜めて、心配げに自分を覗くクラモリの姿。クラモリ、少女が目を開けたのを見て空っぽの色を浮かべる。少女を抱きしめるクラモリ。

●ゲストルーム

まだ汚れていて麻痺のようなゲストルーム。仲む少女の頭上に光輪を載せるクラモリ。ネムはクラモリの背後に隠れるように立ち、怯えた目で少女を見ている。少女の羽は黒い斑紋に覆われている。光輪は、少しふらふらしていたが少女の頭上で安定する。微笑むクラモリ。

クラモリ「元氣になって良かった。私はクラモリ……ほら、ネム、挨拶は？」

クラモリ、背後のネムを少女の前に促す。ネム、クラモリの影から出ようしない。少女、ネムの視線が自分の黒い羽に注がれているのに気付く。無意識に羽を背後に隠そうとする。ネム、ぱっとクラモリから身を離して、走って部屋から出ていってしまう。傷つく少女、半立きになる。

●中庭

少女「私の羽だけ……として……」

答える事が出来ず、表情を曇らせるクラモリ。

●街

数ヶ月経過。5人程の灰羽の子供達を世話するクラモリと、子供達の中で一番年上なので、クラモリの手伝いをするネム。物置からそれを見ている少女。自分の背中の羽に触れ、泣きそうになる。

●寺院 中庭

数ヶ月経過。寺院中庭の四阿の前。話師と対峙するクラモリと少女。クラモリは鳴子をつけている。レキ、灰羽の手帳を手にして話師とクラモリを交互に見上げている。

話師「胸の夢を憶えている？」

クラモリ、鳴子で肯定を示す。話師、少女に向き直り、頭を手を置く。少女、一瞬怯えるが、善悪の無い事を語り、こぼれる。

話師「お前に言葉を発する事を許す。話さない、胸の中で何を見たいか？」

少女「(つかえながら) 私は……気付いたら、石ころだらけの道にいて……真つ暗で……」

話師「それだけか？」

少女、こくと強く、話師、じっと少女を見る。仮面で表情は読めないが、厳しい視線を感じる。少女を近づけようとするクラモリが割って入る。

クラモリ「治るのですか？」

話師「言ってしまうから慌てて口をつぐみクラモリ、話師、答えるでも替るでもなく、」

話師「薬の処方をお教えよう。(少女に向かつて) これからはレキとクラモリ「傍に居るから、私が傍にいるから……」

●ゲストルーム

名乗りなさい、小石という意味だ、レキ「れき……」

数ヶ月経過。ぼん、と、頬を張る音。こんと、鏡が床に落ちる。床には黒い羽が散っている。突然とレキの顔、キッパン脇の巻きの前、少し成長しているレキ。三つ編みにしている。背中上の羽はぼろぼろと切られている。頬を押さえて立ち尽くすレキ。レキの頬を打った姿勢のまま、怒ったような悲しんでいるような表情のクラモリ。クラモリ、レキを強く抱きしめる。なすがままのレキ。自分の行為が自分以上にクラモリを傷つけた事がうまうま理解できない。クラモリの胸が小さく震えている。

●オールドホーム 正門アーチ

夕暮れ。正門前の橋の袂(たもと)で倒れているクラモリ。泥だらけの服、靴を持っている。正門アーチを抜けて歩いてきたネム。その後ろ、アーチの影で隠れているレキ。クラモリに気付く、驚いて走り出すネム。慌てて後を追うレキ。

●ゲストルーム

レキ「私の羽の、薬を採りに行く……」

ネム「クラモリは体が弱いので、一人で森に行くなんて無理な話よ」

ネム、苦しげなクラモリを見下ろし、レキから目を逸らせたまま、硬い表情で

ネム「クラモリがしんやつたら、あなたのせいだから!」

レキ「打ちのめされた表情」

●ゲストルーム 数時間経過

隔は響いている。薄暗い部屋。病棟を続けているネム。レキ、ネムの顔色を窺うように、戸口に立っている。手には大荷物の袋。

レキ「……あの、食べ物、買ってきた。おなか、減ってるかなって思っています……」

ネム「……」

レキ「頼りなげに首を横に振る。ネム、立ち上がり、レキの荷物を抱きかかると」

ネム「レキに背を向け、キッチンに向かって歩きながら」

レキ「……」

●ゲストルーム 夜

目を覚ますクラモリ。食べ物匂いに気付き身を起すと、ベッドサイドに椅子を並べて、レキとネムが手を繋いままベッドに倒れ込むようにして眠っている。ベッドサイドのテーブルには載ったお茶の器。まだ湯気を立てている。クラモリ、眼を細めて微笑み、二人の髪を撫でてやる。

クラモリ「よかった……」

●ゲストルーム

数ヶ月経過。掃除をしている3人。レキの羽は見た目は良くなっている。私には広すぎるかも……

レキ「……」

クラモリ「じやあ、こ、ゲストルームって事じゃないそれで、レキはここに住んで、新しく来た灰羽の世話をする。それがレキの仕事」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

レキ「……」

クラモリ「……」

早朝。陽の出前。ベッド脇の椅子に座り、手持ち無沙汰のカナ、ドアの開く音に振り返る。レキ、遠足で入ってきた。レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

レキ「……」

カナ「……」

話師「だが壁を怖れてはいなかったし、自分が壁を越えれば、皆もすくすくやって来ると思っていた。クワは皆の手足になるのが夢だった」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」

話師「……」



ラッカ「これ……ま……と……ト……カと話者が話する時……」

夕暮れ、オールドホーム、街へ向かう道で交差する橋のある三差路。いつもの道に霧が降り始めている。風は静かに道を木々の上にも積り始めている。空は夕焼けにならず、灰色のまぶゆつりと暗くはやく、街の方から三差路に向け、人影がたつたやちやく、ミドリとヒヨコ、霧は着いていない。

ヒヨコ「……」

ミドリ「……」

ミドリ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」

レキ「……」



# 灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第11話 別離・心の闇・かけがえのないもの

第2稿 (2002.09.26)

○登場人物

ラツカ

ネム

レキ

ヒカリ

カナ

話師

オールドホームの灰羽の子供達

ダイ

シヨータ

ハナ

寮母（セリフなし）

ヒヨコ

ミドリ

廃工場の灰羽A（15歳・男）

廃工場の灰羽B（17歳・女）

廃工場の灰羽C（16歳・女）

スミカ

司書（30代・男）

● サブタイトル

● 壁の中

ラッカ、光箔を集めている。

ラッカ(モノローグ) 『……………冬が深まるにつれて、いろんな事が変わってしまった。クウの巣立ち、罪憑きという病、鳥の死……………。私は繭の夢を取り戻し、仕事を果たした。ただレキは、罪憑きの呪いを受けたまま、取り戻す事のできない夢を、まだ探し続けている……………』

● オールドホーム、南館前。

廃工場に里帰りするダイと、見送る子供たち。

大きな肩掛けの鞆をさげているダイ。外套を着て、むくむくと着膨れている。レキ、マフラーを巻いてやる。

ハナ「いいな、いいな、お泊まり」

シヨータ「僕も行きたい」

レキ「シヨータは来年」

レキ、シヨータの頭をぼんと撫でてダイのほうに向き直る。

レキ「……元気でな」

正門アーチに向かって歩き出しかかっていたダイ、レキの、どこか思い詰めたような言葉の調子に思わず立ち止まる。一瞬きよんとするが、すぐに明るい表情で

ダイ「あつたりまえじゃん」

たたた、と振り返らず駆けてゆくダイ。正門アーチの下では、バスケットを持ったラッカ(バスケットは10話でミドリが持っていたもの)が待っている。ラッカと連れ立って去ってゆくダイ。その後ろ姿をぼんやりと見送るレキ。

● 街

▲みんなのマフラーの色指定を頼まれて、色々迷った揚げ句、グレーに近い色にしたら、背景の壁や街並みの石の色にまぎれてしまって良くない、という事で再考した。確かに、単に配色がいいかという事だけでなく、その話数の舞台に合うかどうかとも考えなければいけなかった。

ダイとラッカ、街を歩く。街路の雪は取り除かれているが、大通りの建物の屋根には雪が積もり、窓からは細長い布が下がっている。街全体が、どこか浮き立った空気に包まれている。やがて二人は川岸の道に出る。街路から大きく視界が開け、ラッカ、軽く深呼吸する。鼻を刺す冷気に思わず眼を細め、ふ、と息をつくと吐息はふわりと白く煙る。

ラッカ「河の匂いって好きだな。……なんか、懐かしい気がして」  
ダイ「そお？」

ダイ、マフラーを外し、ふう、と息をつく。

ラッカ「暑いのか？」

ダイ「レキがさ、風邪ひくからって無理やり着せんだもん」

ラッカ「(くすつと笑い)レキと離れて寂しくない？」

ダイ「(ちよつと強がりと言う感じで)平気に決まってんじゃん。たったの半月だし」

強がって見たものの、心細さはあるらしく、拗ねたような顔でラッカから目を逸らすダイ。自然と視線は川向この工場地区に向かう。廃工場のシルエツトが街並みの彼方にかすかに見える。

ダイ「でも……レキは、平気じゃないのかな？」

ラッカ、小首を傾げるようにしてダイを見る。ダイ、つまらなそうに

ダイ「なんか元氣ないんだ。ほーつとしてさ」

ラッカ「……寂しいのかもね、レキも」

ダイ、ちよつと唇をとがらせ

ダイ「調子狂っちゃうよなあ。そんな遠くに行くわけでもないのに」

ラッカ、はつとした表情。ダイ、ラッカを怪訝そうに見上げる。ラッカ、慌てて微笑み、

ラッカ「そうだよ……」

● 廃工場、正門前

煤けたように汚れた、赤レンガの高い塀と金網に囲まれ

▲初稿では、この前に少しやりとりがあった。以下、削られたやりとり。

ダイとラッカ、街を歩く。街路の雪は取り除かれているが、大通りの建物の屋根には雪が積もり、窓からは細長い布が下がっている。街全体が、どこか浮き立った空気に包まれている。ラッカ、建物の窓から下がった細長い布を見上げ

ラッカ「あれは？」

ダイ「年越しのお祭りがあから。」

ラッカ「古着屋さんの前は、ずつとあったような……」

ダイ「細い路地の店出しっぱなしにするんだ。大通りからでも、目立つじゃん」

ラッカ「へえ(感心して)」

ダイ「……ってレキが言った」

ラッカ「なあんだ」

た廃工場の敷地。重く頑丈そうな鉄扉は閉じられていて、押しても開けられそうにない。途方に暮れるラツカ。ダイ、そんなラツカを尻目にすたすたと歩いてゆくダイ。少し離れた金網に立て掛けてあった木の板をどかす。

ダイ「こっちこっち」

金網が裂けていて、人が通れるようになってる。慌てて後に続くラツカ。

●廃工場、中庭

ラツカ「……誰もないのかな？」

ラツカ「……誰もないのかな？」

中庭を横断し、建物に近づくラツカとダイ。突然、パパン！と銃声のような断続的な破裂音。ラツカの足元から数メートル離れた地面から煙が上がる。飛び上がるラツカ。

ラツカ「きゃっ！」

ラツカ「きゃっ！」

廃工場の灰羽A「ナハハハハ。びつくりしたあ？」

頭上から軽薄そうな笑い声がする。壁の抜けた2階（1階の天井が高いのでかなりの高さです）から、ラツカより少し年上の灰羽の少年がラツカとダイを見下ろしている（5話でレキをからかったうちの一人）。少年は剥き出しの鉄骨に座って鉄柱にもたれ、手に持った爆竹をふらふらと振って見せびらかしている。背中の羽は、相変わらず派手にペイントされている。不意に、少年がもたれている鉄柱に背後から蹴りが入る。ごわああん、と音をたて、揺れる鉄柱。

廃工場の灰羽A「わっ！」

廃工場の灰羽A「なにすんだよ」

廃工場の灰羽A「なにすんだよ」

ヒヨコ「貴重品なんだぜ。むだ遣いすんなよ。祭までもたないだろ」

廃工場の灰羽A「挨拶だよ。お客さんに」

廃工場の灰羽A「わっ！」

バランスを崩し、鉄柱にしがみつく少年。見上げると鉄柱の脇に、仏頂面で腕組みをしたヒヨコが立っている。

▲この「ナハハハハ」という笑い声の時、アフレコに立ち合ったのだけど、自分の中で、笑い方のイメージがあって、実際の声を聞いた時、そのイメージと少し違っていたので、リメイクをお願いした。そうしたら、変なはまり方をしてしまって、結局このセリフだけ10回以上撮り直してもらった。3回くらいやり直して『おしい！』という感じになってると、どうしても『あと一回』という感じでお願ひする事になってしまい、変な迷路に迷い込んだような感じになってしまった。結果的に良くなったので良かったんだけど、この場面だけのキャラクターなので、正直、なんだか申し訳ない感じもした。

灰羽A、顎で中庭のラツカを指す。

ヒヨコ「あん？」

ヒヨコ、下を見下ろす。びっくりしたまま固まっているラツカと、興味津々と言った風に爆竹の破裂した辺りをきよるきよる見回すダイ。ラツカ、驚いた拍子に髪の手が逆立っている。

ヒヨコ「あー、あのくせっ毛……………」

向かいの棟から数人の灰羽の少女がばたばたと駆け出てくるのが見える。ふん、と鼻を鳴らし、口をへの字に結ぶヒヨコ。

●廃工場、中庭

ミドリ「わー、ありがとー」

ミドリを筆頭に、数人の灰羽の少女がラツカとダイを取り巻いている。バスケットの中はヒカリが作ったわっかのパンケーキ（パン屋で売っているものより、見た目で一工夫ある感じに）。ミドリは普通の格好だが、他の二人は髪や羽を染めていたりするので、やや気圧されているラツカ。

廃工場の灰羽の少女B「かえって悪いみたいね」

ミドリ「これ、あなたが作ったの？」

ラツカ「ううん、これはヒカリが、えつと……………」

廃工場の灰羽の少女C「あー、知ってる、パン屋で働いてる子だ」

そんな女の子同士の会話を退屈そうに聞いているダイ

（ラツカ、名前を聞かれ自己紹介するやり取りを入れる）。

周囲を見回すと、2階から降りてきたヒヨコと目が合う。

スケートボードを片足で漕ぎ、女の子の一团を横目で見

ながら中庭を横切っていく。ダイ、スケートボードを羨

ましそうに見ている。ヒヨコ、ふ、と笑い、足を止め、

ボードをダイの方に蹴り出す。

ヒヨコ「やってみ」

ダイ、喜色を浮かべて足下に滑ってきたボードに乗り、見様見まねでヒヨコの方に走り出す。ふらふらと危なっ

▲このあたりは、絵にするのが大変そうだなと思いつながら書いていました。廃工場が絵的に大変というのもあるのですが、大勢がいろんな場所に居るので、その空間的な位置関係などをうまく説明しながらテンポよく会話を進めるのが難しそうだという気がしました。結果的には、そのあたりがうまく処理されていて、良かったと思います。

▲帽子と赤毛は、もう時間がなくて、おまかせて……………という話になりかけたのですが、1時間くらいはばーっと描いて出しました。思いのほかキャッチーな感じに仕上がって、ここしか出番がないのが惜しいくらいでした。

■ 楽工場の灰羽少女B (17歳)



赤、黄

茶

茶色の髪を、部分的に  
染色した感じです。レキのような  
ストレートではなく、ちょっと  
ウェーブかかっています。



羽先の  
線をいじり  
おろす感じで  
染めてます



■ そんなわけで帽子と赤毛。  
羽根の色は無しになりました。

■ 楽工場の灰羽C (16歳)



大丈夫と思いますが、  
ミドリと空調気がかぶるようなら  
再考します。

髪、赤く染めています。アニメ的な  
色じゃなく、リアルに染めた色の感じになると  
いいのですが……。



羽、一枚ずつ赤とか  
ピンクとかに  
染めています。

かしい走り。

ミドリ「ケガさせないでよ！」  
ヒヨコ「わーってるよ」

ヒヨコ、相変わらずの仏頂面でミドリ達の方を振り向く。次いでラツカを見、軽く頭を下げる。ラツカも微笑んで軽く会釈する。ヒヨコそれで用は済んだとばかりにラツカ達に背を向け、ダイの背中を押してボードを加速させ、駆け去ってゆく。けたけたと笑って喜ぶダイ。ミドリ、あきれ顔。

ミドリ「つたく、ガキなんだから……。ま、子供の相手にはちょっといいか」

一同、軽く笑う。和やかな雰囲気。ラツカ、遠くのヒヨコとダイを見る。バイクの練習用なのか、中庭の外れには、赤いコーンが並べられていて、ダイはスケートボードでその間を縫って走ろうと奮闘している。

ミドリ、ちよっと心配そうにラツカを見て

ミドリ「怒ってる？水湖（ひょうこ）、と発音。漢字表記の場合は常に（そうです）のこと」

ラツカ「ううん、まさか」

ミドリ「よかった（安堵、というよりあつからかんとした調子）」  
ラツカ「それより、ダイのこと、よろしくお願いします」

深々とお辞儀をするラツカ。

廃工場の灰羽の少女C「あはは、逆よ逆。こっちがずっと子供たちの世話、お願いしてんだから」

廃工場の灰羽の少女B「ほんととはこっちが挨拶に行くのが筋なんだけどさ。例のゴタゴタのせいで、ウチら、そっちとは疎遠になっちゃったから。話すきつかけもなかったし……」  
ラツカ「こたこた、って……？」

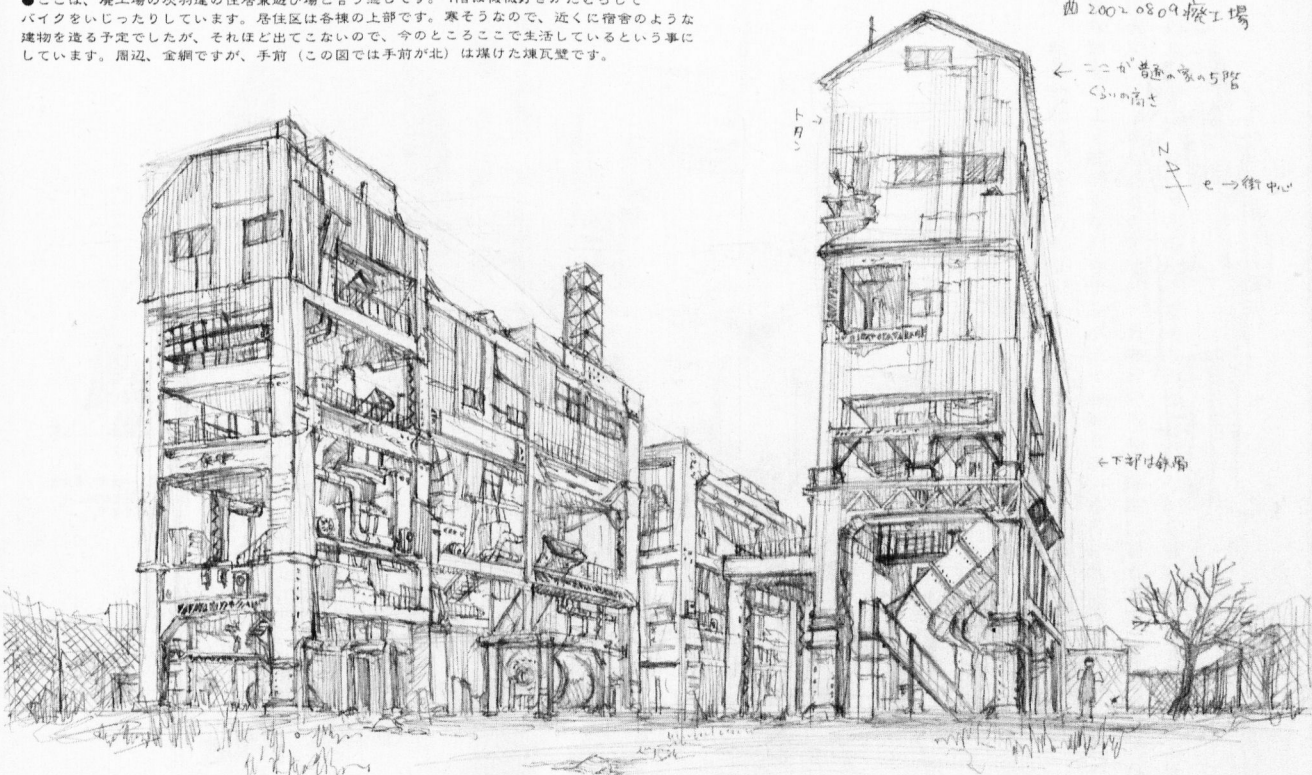
廃工場の灰羽の少女B「そっか、まだここに来て間がないんだね。うん、まあ……昔いろいろあったのよ。ね、ミドリ」

廃工場の灰羽の少女B、冗談めかして隣のミドリを肘でつつく。

ミドリ「……知らない！」

ぶい、とそっぽを向き、足早に立ち去ってしまう。

●ここは、廃工場の灰羽達の住居兼遊び場と言う感じです。1階は機械好きがたむろしてバイクをいじったりしています。居住区は各棟の上部です。寒そうなので、近くに宿舎のような建物を造る予定でしたが、それほど出てこないで、今のところここで生活しているという事になっています。周辺、金網ですが、手前（この図では手前が北）は煤けた煉瓦壁です。



■この絵を描いていた時期は、いい具合に仕事漬けになっていて、他の事が頭から飛んでしまっていた分、絵に対して異常に集中力が高かった。そういう状態は長くは続かないのだけど、うまく息抜きを入れながら、そういうテンションを持続できるような生活サイクルをつくりたい。今は雑事が多くてどうしても1つの作業に集中できない。



廃工場の灰羽の少女B「あーあ、こーじよっぱりなんだから」  
 廃工場の灰羽の少女B、C、顔を見合わせ、肩をすくめて笑う。

●街と工場地区を繋ぐ橋

橋を渡るラッカ。背後から呼び止められる。

ミドリ「はあ、はあ……ねえ、待ってよ……」

振り返るラッカ。息を切らせてミドリが駆けてくる。ラッカの前まで来ると橋の欄干に半ばもたれるようにして息を整え、最後に大きく息をついて、もっていた傘をラッカに差し出す。

ミドリ「ふう……うっかりしてた。これ、レキに渡して。借りてたの」

ラッカ「うん……」

傘を受け取るラッカ。奇妙な間。お互いに何かを言おうとして言い出せずにいる。

ミドリ「……相変わらずよね、レキのおせっかいは」

照れているようにも、むくれているようにもとれる口調。レキに対する感謝の言葉をうまく口にできないのだと気づき、ラッカはそれを微笑ましく思う。ミドリ、相変わらず拗ねたような表情のまま

ミドリ「あのさ、ほんとに何も知らないの？」

ラッカ「(ちよっと考え) ええと、前に……ここであなた達とレキが言い争ってるの、見たの(尻すぼみに)……」

ミドリ、はっとして少し身構える。ラッカを睨め付けるような、ちよっと険のある目つき。傍にある仕切りの鉄柵(設定参照)に腰掛けてラッカを見据える。

ミドリ「……それで？」

ラッカ「……噂を、聞いたの。レキが、廃工場のヒョコ……さん(どっ呼んでいいか戸惑う)、と……」

ミドリ、吐き捨てるように

ミドリ「駆け落ちしたってんでしょ。はっ、笑わせないでよ」  
 ラッカ「違うの？」

▲ここで、ラッカとミドリが二人だけで会話するシーンが欲しい……でもどうしよう、と頭を抱えた瞬間に、傘の事を思い出した。

ミドリ「レキが氷湖を巻き込んだのよ！自分のわがままでさ。氷湖は……あやうく死ぬとこだったんだから」

ラッカ「レキは……レキはそんなひどい事しない……」  
ミドリ、肩を怒らせ、ラッカを怒鳴りつけようと大きく息を吸い込むが、思いとどまり、肩の力を抜いて息を吐く。やや冷たい声で

ミドリ「あなたはレキの事、何も分かってないのよ……」

●壁の中の回廊

回廊の札の前。光箔の蒐集を終え、のろのろとした動作で筏を留めていたロープをほどいているラッカ。ほどいたロープを握ったまま、うつむき、ぼんやりと考え込んでしまう。

ラッカ（モノローグ）『そうなのだろうか……。悪い考えを振り払うようにと首を振り）そんな事ない。レキはどんな時も優しかった。自分がつらくても、いつも周りに心を配って……』

はっとするラッカ。

ラッカ（モノローグ）『私はその事に、ずっと気づけなかった……。クウが行ってしまった時も、私が罪憑きになった時も、本当はレキの方が苦しんでいたんだ。なのに、私もレキに頼ってばかりいて……』

いつのまにか、握っていた掌からロープはするりと抜け落ち、筏はゆっくりと音もなく下流に流されている。はっと顔を上げるラッカ、ロープを取り落としした事に気づき、慌てて左右を見回し、壁に掛けておいた襦を引つたくと、下流に向かって走る。走るといつても、防護服のせいでよたよたとおぼつかない足取り。

回廊は、光源らしい光源はないものの、壁全体が幽（かす）かに光を放っていて多少視界が利くが、自然の鍾乳洞の区域は暗い。その暗がりの中に筏は消えようとしている。さざめく水面に一瞬見えた黒い筏の影に、ラッカは襦を差し伸べ、なんとか筏を引っ掛けようとする。

▲このあたりは、もうキャラクターが勝手に動いていて、自分の頭の中で次から次へとほぼりアルタイムで進行する物語を追うので手一杯だった。ラッカの一連の動作は、作画的に難しく、物語の進行だけを考えるならもっとあっさりまとめても意味的には変わらなかったと思う。でも、結果的にこのシーンで一度気持ち動転し、はっとする、という感情の起伏があった事で、次のシーンへの繋がりが良くなっていると思う。

ラッカ「つう………わっ」

流れてゆく筏の推力を支えきれず、バランスを崩し、ラッカは水路に身を踊らす。とっさに跳躍し、なんとか筏の中に着地。激しく揺れる筏の中で、やっとの事で身を起こすと、遠くにぼうつとした金色の光点がある。回廊は緩くカーブを描いているため、今まで視界に入らなかつたが、光点は淡いものかなりの大きさ。

ラッカ「あれは………？」

流されるままに、光源に近づいてゆくラッカ。立ち並ぶ柱の中の一柱に、真新しい札が掛けられていて、札とその周辺に、円を描くようにびっしりと光箔が生まれている。ラッカ、筏を止め、回廊に上がる。

ラッカ「………すこい………」

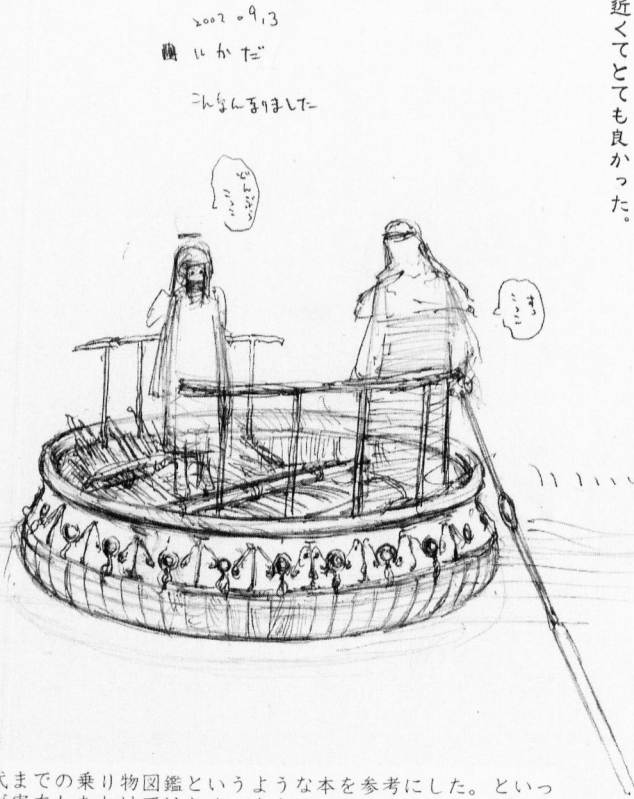
ラッカ、柱に近づき、札に顔を近づける。光箔のおかげで、札に描かれている図形がはっきりと見える。

ラッカ「この文字………どこかで………」

何かの気配に気づき、振り返るラッカ。何もいない。不安げに回廊の彼方に目をやると、暗がりの向こうで、幽かに水のささめくような音。不意に冷気が吹き込んできたかのような悪寒に襲われ、ざわつと総毛立つラッカ。静まり返った水面に、つうつと波紋が走り、過ぎてゆく。さわさわさわ、とささめきが近づいてくる。いつか森で迷った時、壁の前で聞いた何か、によく似ている。雨が降り出したかのように、何も無い水面に無数の丸い波紋が生まれ、広がってゆく。無数の姿無き連が爪先立ち、囁きあいながら水面の上を歩いていくかのよう。壁際まで引き、フードを目深にかぶるラッカ。恐怖とは違う畏れに、瞬きもできず立ち尽くしている。ささめきが大きくなる。ラッカの眼前を、無数の子供たちの笑い声と水紋が通り過ぎてゆく。再び、いささか唐突なほどあけなく、静寂が戻る。

●中庭

▲この明るく輝く光箔の表現はイメージに近くとても良かった。



▲グリの街の中については、物も人も、基本的にやさしく、あたたかみのある存在として描いている。ただ、壁の描写については、正邪の見極めがつかないような得体の知れなさを残そうと意識した。これは、壁がこの世界の最後の、というか唯一の境界で、絶対的な存在である、という事が、観る側に強く伝わっている必要があると考えたため。

■筏。古代から現代までの乗り物図鑑というような本を参考にした。と違って、現代が実在したわけではない。本をバラバラと見て、しばらくデザインを考えた。結局、バラバラと見た一連の写真的イメージを適度に混ぜ合わせたようなデザインになっている。

奥の扉を開け、ラッカが入ってくる。防護服は脱いでいて、羽と腕に鳴子を付けている。四阿（あずまや）の前。話師が、何をするでもなくただ、立っている。ラッカに気づいた様子はない。仮面からわずかに覗ける横顔は陰しく、虚空を睨んでいる。ラッカ、おずおすと腕の鳴子を鳴らす。話師、やや虚を突かれたかのように、ラッカの方を向く。

話師「済んだか。……………ああ、レキが迎えにきていた。お前を心配しているようだ」

ラッカ、答える事ができず、曖昧な表情で話師を見る。

●寺院前

やや陽は傾き始めている。ラッカと話師、並んで寺院を抜け、崖沿いの道を歩いてゆく。

ラッカ「レキは……………最近少し神経質になってるみたいです」

話師「レキは自分に巣立ちの日が訪れない事を気に病んでいる。同時に、巣立ちの日が訪れなければいいとも思っている」

ラッカ「私も……………苦しむレキを見るのはつらいです。でも、レキに行つて欲しくない」

話師「レキはまだ迷っている。……………ラッカ、お前には鳥が訪れ、記憶の欠片を埋める事ができたが、レキにはそれが無い。レキは一人で自分の心の闇と向き合わねばならない。それはつらい試練だ」

ラッカ「レキはずっと、自分の夢の情景を、絵に描いていました。私も一度見せてもらったけど、何が描かれているのか分かりませんでした。……………レキにもよく分からないみたい」

話師「レキにはもうそれほど時間が残されていない」  
ラッカ、身を固くし、足を止める。遠くで滝の音が聞こえる。

話師「それがいつになるかは分からない。だがこの冬が明ける頃には、結論が出ているはずだ。その時までレキに迷いが残っているなら、レキはここに留まるだろう」

ラッカ「留まる事なんて、できるんですか？」

▲話師をどの程度人間くさいキャラクターにするかについては、非常に気を使った。レキを案じているが、それ以上に強くてこの世界の規律に準じなければならぬという重責を負っている、という事がうまく伝わらないと、何もかもが軽くなってしまう。

話師「……………こくまれに、そうなる者もある。だが、その者はもう灰羽とは呼ばれない。羽と光輪を失い、人とも灰羽とも交わる事なく暮らし、やがて老いて死ぬ。それは静かで平穩だが、孤独な生活だ」

ラッカ、話師を見る。フードを頭に固定している黒い輪。背中に背負った、木でできた模造羽。そして仮面。

話師「私は……………いや、灰羽連盟は、灰羽達が無事に巣立つ事を願う。だが、今のレキは私を拒んでいる。私の言葉はいつもレキの心を頑なにしよう……………」

ラッカ「私……………レキの力になりたい。レキはずっと苦しんでいたのに、それを隠して私を助けてくれた……………。だから、今度は私がレキを助けなきゃ」

話師「……………レキを救うという事は、レキに別れを告げるという事だ。レキがこの地を去れば、二度と見(まみ)える事はないかもしれない。その覚悟はあるか」

ラッカ「……………」

怯むラッカ。考え、逡巡し、答えを出せぬまま、俯く。

●寺院と街とオールドホームを結ぶ三差路

夕暮れ。道だけは辛うじて雪を除けてあるが、他は雪に埋まっている。スタンドを立てたスクーターのシートに軽くもたれ、煙草を吹かしているレキ。打ち沈んだ表情で、ぼんやり遠くを見ている。崖沿いの道を歩いてきたラッカに気づき、すぐに笑顔を作る。だがそれはレキの本心の反映ではなく、他人に心の内を見せたくないという、感情の顕れに過ぎない。今のラッカにはそれが分かる。

ラッカ「ありがとう、わざわざ」

レキ「いや、絵の具を買ったついで。(スクーターに跨がり直しハンドルをぼんと叩く)この雪じゃ、そろそろこいつも乗り納めかな。(ラッカの方を向き)仕事はどう?頑張ってる?」

ラッカ「うん……………(レキの荷物を見て)絵、描いてるの?」

レキ「(自嘲気味に)いや。私のは……………ただ絵の具をこねまわし

▲少しづつ、脚本の書式から小説的な書き方にシフトしてしまっている。気づいていたが、どうしてもこういう内面描写を書きたくて、書いてしまった。脚本家の人達は、常に紙数を制限され、キャラクターの細かい心の起伏を描く事が難しい状況下で、よく書き続けられるなあと感心してしまう。僕はここまで自分が作品世界に入り込んでしまっただけで、書かずにはいられなくなってしまうと思う。

「ただけ」

ラッカ「……………そうだ。これ、渡してって（傘を差し出す）」

レキ「ミドリから？」

ラッカ「うん。……………友達？」

レキ、その問いには即答せず、傘をスクーターに固定し、エンジンを吹かす。2人乗りで帰り道。抑え目のスピードのスクーター。

レキ「……………友達だった。昔はね。……………なんかひどい事言われた？」

ラッカ「（狼狽し）う、ううん、何も……………」

レキ「（疲れたような笑み）怒らないでやって。……………憎まれ

口叩けど、ほんとはいい子なんだ……………」

ラッカ「……………」

レキ「（独り言のように）もう5年か……………。やれやれ、意地っ張り同士、とうとう仲直りできなかったな……………」

レキの、冗談めかしたようなほやき声。だが、今のラッカにはその裏側に、希望を見失いつつある諦念の気配が感じられる。ふと、ラッカは自分とレキの光輪を比べる。わずかだが、レキの光輪は輝きを失いつつあるように見える。ラッカ、レキにぎゅっとしがみつく。

ラッカ「レキ、私、頑張るから」

レキ「ん？ああ、頑張りな。なんか辛臭い仕事だけど、やっぱり働

いてこそ一人前の灰羽だからね」

うわの空の返答。噛み合わない会話。

●ゲストルーム

カナ「こちそーさん」

朝の食卓。ダルマストーブがあり、その上のヤカンがシュンシュンと湯気を立てている。ヒカリとラッカとカナが朝食をとっている。ひと足早く食べ終わったカナが立ち上がり、椅子の背にかけてあったコートを着込んでいるところ。慌ただしく懐中時計を見る。

カナ「ちえ。ラッカはいいよな。仕事昼からで」

▲本編では懐中時計は見せられませんでしたがね。残念。

ヒカリ「ほやかないほやかない。(ラッカを見て)でもよかったね。ちゃんと仕事見つかった」  
ラッカ「うん」

手際よく食器を片づけているヒカリ。ぎい、と力なくドアを開けて、ネムが入ってくる。片手で頭を押さえ、ぼーっとしている。

ネム「う〜……………」

ヒカリ「どうしたの？」

ネム「カゼ……………みたい」

カナ、びよんと一歩飛び退き

カナ「うわっ。うつすなよ」

ネム、カナをじと目で睨み、ストーブの前の席に座る。

ネム「……………薄情者。(咳をし、テーブルを見回し)……………レキは？」

ヒカリ、首を横に振る。

ヒカリ「なんかね、絵を描いてるんだって。だから今日も私が子供

たちの食事当番(楽しそう)」

ネム「最近ずっとじゃない。どうしたのかしら……………。ああ、もう。

スクーターで図書館に休むって言ってきたらもうと思っ

のに」

ヒカリ「カナに頼んだら？」

カナ「アタシい？だめだよ、遅刻しちゃう」

ヒカリ「10分くらいでしょ？いいじゃない」

カナ「それがよくないのがウチの親方なんだっての」

ラッカ「私、行くよ。時間あるし」

ネム「ほんと？悪いわね(咳)」

ラッカ「平気。カナが乗せてくれるから(ね、という感じでカナを

見て)」

カナ、えーっ、という顔。結局働かされるのかと、がくつ

と肩を落とす。

●中央広場

軽く雪が降り出している。自転車で走ってくるカナと後ろに乗っているラッカ。カナ、息が上がっている。びよ

▲ラッカはすぐ誰かの自転車とかスクーターに乗れたがる気がする。自分で漕げ！

んと飛び降りるラッカ。二人、手を振りあい、ラッカは図書館へと駆けてゆく。

●図書館、展示室前

司書「……ネムが？そう……。まあ、急に寒くなったからね。わざわざ「苦勞さん」

展示室の近く。30半ばの司書の男にネムが病欠する旨を伝えるラッカ。軽くお辞儀。司書も軽く手を上げ、通路の奥に歩み去る。

一人になって、ふつと息をつく。何気なくあたりを見ると、展示棚に本の化石が展示してある。

はっとするラッカ。近づいてよく見ると、表面にかすかに何かが彫つてある。壁の中の札に描かれた文字（図形）とよく似ている。

ラッカ「これ……」

スミカ「あれえ、ラッカちゃんじゃない。どうしたの？」

がつしりした長靴を履いたスミカ。傘をさし、厚手のコートを着ている。

ラッカ「スミカさん……。うわあ」

スミカ「ふふ。もうすぐ生まれるの」

ラッカ「出歩いて平気なんですか？」

スミカ「平気平気。閉じこもってたら息が詰まっちゃうわよ。年越しの準備もあるし、たまには散歩くらいしなきゃ」

ラッカ「……（お腹を見て）なんだか不思議ですわ」

スミカ「そうね……。……（お腹を撫で）時々考えちゃうわ。……」

ラッカ「……この命はどこから来たんだろうって」

スミカ「……」

スミカ「そうだ。ネムは？」

ラッカ「あ、風邪で休むって。私、それを伝えに来たんです」

スミカ「あら残念。（本の化石を見て）……ずいぶん熱心に見てたわね……。ふうん。本の化石かあ」

ラッカ「本の……化石？」

スミカ「本当は何なのか分からないんだけど。昔、西の森の奥に遺

▲本の化石は、5話で出す予定だったが、5話が收拾がつかないくらい長くなってしまい、そんな余裕はなくなってしまった。伏線としては、5話でちらっとでも出しておきたかった。

本の化石は、石で出来た本のような形をしているが、考えていたのは、普通の化石のように、石塊の中に本の形の窪みがあり、そこに文字が、小さな骨の様に散乱しているものだった。しかし、設定を起こす時間がなく、うまく伝わらなかった。しかし、見てみたら石で出来た本のような形の方がひと目で意図が伝わるので、そのまま採用しました。





■ スミカ  
冬服.



■ スミカ  
冬服.



■ スミカ  
冬服.

■ スミカ冬服。右上は一稿で、上田さんが、『革製っぽい質感でマクニティ用のコートはない！ちょっとの間しか着ないのに！』とものすごく力強くダメ出しをしたので描き直した。別に革製というつもりで描いたわけではないのだけど、しわの感じとかが革製っぽかったらうか。

跡があつて、その石の中にこうして石の本が埋まつてたんだつて。まるで何かの力で石に変えられたみたいでしょう」  
 ラッカ「なんて書いてあるんですか？」  
 スミカ「分からない。所々に……ほら、何か彫つてあるでしょう。文字とも、原始の絵画とも言われてるけど。……もし絵だとしたら、手のひらかな？」

親指を示す縦の棒と、残りの指を示す4本の横棒。確かに手を模したものに見えなくもない。

ラッカ「……………」

●街と工場地区を繋ぐ橋

昼下がり。絵の具で汚れた帆布のトートバッグを肩にかけたレキ。バッグからは（手製の）スケッチブックや画材が顔を出している。片手には、大きなペンキ缶のような絵の具の缶と刷毛を持っている。

橋の前を通り過ぎ、河沿いの道を歩く。俯き、思い詰めた暗い表情。遠い子供の歓声に気づき、顔を上げる。対岸の河縁（かわべり）（船着き場などがある、街路より低くなった部分です）の舗装された通路で、スケートボードの練習をしているダイとヒヨコの姿が目にとまる。ダイは自分用の小さなボードに乗って、ヒヨコに似たキャップをかぶっている。まるで小型のヒヨコのように。何度か

転んだのであるう、頬や腕に絆創膏が貼られているが、そんな事は気にもとめず、等間隔に並べられた空き缶の間を縫うように、すいすいと走り抜けてゆく。ゴールで待っていたヒヨコが握った拳を胸の高さに掲げると、走ってきたダイがそれに自分の拳をこっん、とぶつける。はちきれそうな笑顔のダイ。レキは渡る事の許されない橋の向こうに広がるその光景をただ見つめながら、不意に襲ってきた喪失感に顔を歪ませる。自分が長い間かけてこつこつと結んで来た、世界と自分を結ぶ糸が、ひとつ、またひとつと切り落とされてゆくかのように、何もかもが自分の手の届かない場所へと遠ざかつてゆく。

▲やはり伏線としては弱いなあ。5話から引っ張りがかった。反省。

▲ここもちょっと長すぎたのでまとめられている。確かに、実際に芝居にするとこれでは長すぎてしまう。

失意、不安、焦燥、そのどれでもあり、同時にどれとも違う刺すような心の痛みに、レキはただ為す術もなく立ち尽くす。

●街路

橋の北側から川沿いの道を南に歩いてきたラッカ、ずっと先の道端で、呆然と立ち尽くしているレキに気づく。

ラッカ「レ……………」

声を掛けようとするラッカ。だが、レキのただならぬ雰囲気に気づき、立ち止まる。レキの視線の先を追う。ヒョコとダイの姿が見える。

ミドリ（回想セリフ）『あなたはレキの事、何も分かってないのよ』

ラッカ、一瞬怯み、だが、意を決して一歩踏み出す。レキに向けて、笑顔を作り、努めて明るい声で

ラッカ「レキ」

レキ、振り返る。僅かに眼を細め、すぐに笑顔を作る。

●街路

街の外れ。オールドホームへの帰り道。先をゆくレキ。すぐ後をついてゆくラッカ。

レキ「……………ネムが？へえ、珍しいな。何か果物でも買ってくれればよかったかな」

いつもの飄々としたレキ。冗談めかした口調で言い、ラッカを見る。微笑み返すラッカ。

ラッカ（モノローグ）『からっぽの笑顔をはりつけて、私たちは歩く。どんな時でも、レキは優しい。誰にも心配かけたくないから、誰にも頼りたくないから、レキは笑う。どうしてもっと早く、気づいてあげられなかったんだろう……………。私はずっと、レキの一番近くに居たのに……………』

ラッカ「……………明日が来なければいいのに……………」  
レキ「（ふっと笑みを浮かべて、不思議そうに）なに？突然……………」

▲ラッカはまだ、人を救うという事の重み、他人の心の弱さや矛盾を理解し、その幾許かを引き受けるという事が、どれくらい自分自身をすり減らしてしまうのか、という事がこの時点ではまだ理解できていない。

ラッカ「今日の次は今日なの。その次もその次の日も……………ずっと今日ならいいのに。……………そうしたら、ずっとレキと居られる」

レキ、ラッカに背を向けたまま、空を見上げる。雪はやんでいるが、重い色の雲に覆われた、灰色の空。

レキ「永遠なんて、あり得ないよ。……………何もかもが、いつかは終わる」

ラッカ「……………」

レキ「……………だから、いいんだ」

ラッカ「えっ……………？」

レキ「今が今しかないから、この瞬間が……………こんなに

も大事なんだ」

ラッカ「うん……………そっか。そうだね」

寺院と街とオールドホームを結ぶ三差路。立ち止まるラッカ。

レキ「ああ、仕事か。頑張りな」

ラッカ「レキも……………」

手を振ろうとして、泣き出しそうになるラッカ。踵を返し、がけ沿いの道を駆けてゆく。

16

●寺院へ向かう道

駆け続け、息を切らし、どっと崖もたれるラッカ。息を

つき、天を仰ぐと、堰を切ったように涙があふれる。

ラッカ「泣いちゃだめだ。私がレキを助けるんだ……………」

ラッカ、泣きやむ事ができない。俯き、自分の頬を力なく叩く。叱咤するように

ラッカ「笑え、ラッカ！……………笑え……………」

●オールドホーム、ゲストルーム

そっと扉を開けて、レキが入ってくる。足音を忍ばせ、部屋の中央へ。テーブルに荷物を置き、しばらくじっと佇んでいる。無意識に煙草の箱をとり出し、しばらく迷っ

▲何か、他のゲームで『永遠なんてない』というような有名なセリフがあったらいいけど、知らなかった。ここでのセリフはどちらかというと空虚なニュアンスのもので、レキの実感というより、レキは本心を隠し、ラッカのために言葉を選んで話している。ラッカは、ここでもまたレキは自分を気遣い本心を隠しているのだという事に気づき、どうしていい分からなくなってしまふ。

▲このシーン、最初は絵的にすぐくさらっと流れてしまっていたので、見上げた空が大きく映るような構図にしてほしいとお願ひした。

▲これを書いている時は、ラッカの感情の流れとしてこのシーンは自然だと思ったが、ラッカが不安定すぎるという意見もあり、今見返すと確かにそうかもしれない。

た後、まだ中身の入っている箱を振り潰して、ライターと一緒にテーブルに置く。ふとベッドを見ると、ネムが横になっていて、湿ったタオルが額からずれて枕元に落ちていた。レキそっと歩み寄り、ベッドサイドのテーブルの洗面器でタオルを絞り直し、ネムの額に当ててやる。ネムは目を覚まさない。レキ、毛布からはみ出しているネムの手を、その指先をそっと握る。レキ、囁くような小さな声で

レキ「ネム。長い間ありがとう。もし、いつか……………クラモリに会ったら伝えて。ごめんさい、ありがとう……………って。……………私は、どうやら、そっちへは行けそうにないから……………」

レキ、音もなく立ち去る。かすかにドアの閉まる音。ネム、僅かに身じろぎし、うわ言のように呟く。

ネム「……………レキ……………」

●レキの部屋（中央の部屋）

カラン、という音。絵の具の缶の蓋が捨てられ、床に黒い跡を残しながら転がってゆく。机の脚に当たり、その場でバランスを失ったコマのように回り続ける。髪を後ろで結んだレキ。決心した表情。

レキ「もう、終わりにしよう……………」

ボタン、とドアの閉まる音。黒い飛沫を床に散らせて、蓋も床の上で動かなくなる。

原稿用紙200字詰め2枚

▲第1話について。大きく物語が展開しなかったため、本格的に『13話でまとまるのか?』と周囲にかなり心配されました。この話数では静かに話を進めながら、ラスト2話のための伏線を張っています。12、13話とはかく一気に物語を展開させたかったため、流れを止める要素はできるだけこの話数で出し切っておきたかった。

同時に、ここから急加速してゆく物語の中で、それぞれの登場人物たちの心情を、まずここで丁寧に描いておきたい、というのもありました。ここで各キャラクターの人間関係や抱えている感情が理解できていないと、ここから先の急展開の中で、観ている側が置いてけぼりになってしまう可能性があり、それを避けるためにも、ゆっくり丁寧に日常を描く事に比重をおきました。

といっても、書いていた時は無我夢中で、そんな事を考える余裕はほとんどなかったのですが。

この話数は、初稿と決定稿の差がほとんど無いので、初稿は収録しない事にしました。一部長さの関係で削られたやりとりは、解説文の方に入れてあります。

# 奥付

灰羽連盟脚本集第七巻

発行責任者 AB / 安倍吉俊

発行元 むてけいロマンス

発行年月日 2006年12月07日

連絡先 abetc@mac.com

無断転用を禁じます



